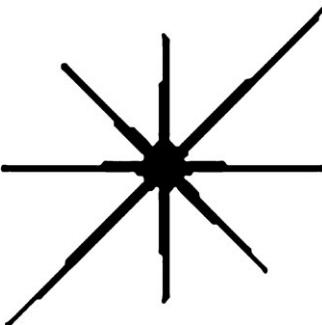


コメット通信 65

['25年12月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 映画と精神分析】

- 精神分析から考える映像の「触覚性」
——アルモドバルとベンヤミン
伊集院敬行—————3

- 情動の唯物論的な露呈
——『チャーリーとチョコレート工場』の場合
遠藤 不比人—————5

- 映画と精神分析の親密性
木原圭翔—————7

- 精神分析臨床で映画が登場したら
小林陵—————9

- 【追悼 浅沼圭司】
浅沼圭司頌
——大胆にして小心、ダンディにしてシャイ
佐々木健—————12

- 浅沼圭司先生を偲んで
津上英輔—————14

- 浅沼圭司先生を追悼する
木村建哉—————16

- 【連載】
ローマのメチャクチャ小説
——本棚の片隅に 25
四方田犬彦—————19

- コメット通信（1-65号） 総目次—————28

【特集 映画と精神分析】

精神分析から考える映像の「触覚性」

——アルモドバルとベンヤミン

伊集院敬行

ペドロ・アルモドバル（1949-）の『抱擁のかけら』（2009）は、映像（映画や写真）が「見る」ものではなく、「触れる」ものであることの寓話かもしれない。この映画は彼が愛したレナの死と自身の失明をきっかけに、名をハリーと改め、脚本家として生きる映画監督マテオの回想の物語である。

ある日、かつての恋敵エルネストの死が報じられると、それと時を同じくしてライXと名乗る青年がハリーの元に現れ、父殺しの物語の脚本を共同執筆することを持ち掛ける。実は彼はエルネストの息子ジュニアで、彼の来訪は、レナとの死別以来止っていたハリーの心の時計を再び動かす。14年前、新進気鋭の映画監督であったマテオは新人女優のレナと出会い、恋に落ちる。だが、レナは大富豪エルネストの愛人であった。エルネストから逃れるようにして季節外れの避暑地に身を隠すマテオとレナ。しかしある夜、二人の乗った車は交通事故に遭い、マテオはレナと光を失ってしまう。

レナ以前のマテオの恋人で、今は映画製作の相棒ジュディットの息子ディエゴを聞き手にして語られるこの物語は、典型的なエディップス劇であった。自由連想にも似たこの語りによってハリーは記憶を辿り、トラウマ的な出来事と向き合い、マテオであったことを取り戻す。そしてちょうどそのころ、彼はライXから一枚のDVDを手渡される。それはジュニアが偶然に撮影したマテオとレナの交通事故の映像だった。

増感と拡大によるノイズでざらつく映像の中で、マテオとレナはキスをしている。だがその瞬間、巨大な黒い車が、二人が乗った停車中の赤い小型車に激突する。これは母（レナ）に近づきすぎた子（マテオ）への、父（エルネスト）による去勢的な罰である。もちろんマテオにはこの映像を見ることができない。そこでマテオはディエゴにキスの映像をコマ送りするよう頼む。引き伸ばされた時間の中でキスをする二人がスクリーンに映し出される。マテオは手をかざし、その光を感じようとスクリーンを愛撫する。

ところで「複製技術の時代における芸術作品」（1936）でベンヤミンは、フロイトを引用しながら肉眼の視覚を「意識」に、非人間的な機械の眼としての映像の視覚を「無意識」に喩えている。スローモーションや拡大といった補助手段を持ち、無数の細部に満たされた映像は、人間の意識からこぼれ落ちたものが織り込まれた無意識の空間である。それゆえ映像を見ることは抑圧されていたものと出会う契機になる。劇中でもコマ送りの映像を通して、マテオは心に封印していた思い出と向き合う。それはトラウマ的であると同時に失われたレナ／母との再会でもある。そしてこの再会を叶えるもうひとつのものが映像の触覚性である。

では映像が触覚的とはどのようなことか。ベンヤミンはこの語をアロイス・リーグルの『末期ローマの美術工芸』（1901）から借りている。この書物でリーグルは、視覚を大きく「触覚的」（taktisch, haptisch）な把握と「視覚的」（optisch）な把握の二つに区別する。絵画においてこの触覚的把握というのは、対象に近寄り、直接触ってその「存在」を確かめながら描くことである。そのため触覚的把握では、古代エジプトの壁画やギリシャの壺絵のように対象を輪郭で描くことになる（近接視で、時間をかけて部分から全体を構築する見方）。一方、視覚的把握とは対象から遠く離れ、それが「空間の中にあるさま」を描くことである。そのため視覚的把握では、遠近法絵画のように対象を陰影で描

くことになる（遠隔視で、一瞬に全体を把握する見方。ベンヤミンの言う肉眼の視覚はこれに当たる）。

ベンヤミンはリーグルによるこの区別に倣い、映像の視覚を触覚的把握の側に分類する。レンズを使う以上、映像は遠近法に従う。そのため映像の視覚は、一見、視覚的な把握のように思われる。しかし、フィルムや印画紙は人工網膜として、対象の光を感じ、その感触を機械的に複製（定着）する。とすれば映像は光を介して対象の存在と結びついている。

映像は無意識に浸透された空間であり、そこにあるのは意味ではなく存在である。それゆえ映像は見る者に「ショック」を与える（なお、ベンヤミンがピエール・クロソウスキーと共に作成した「複製技術の時代における芸術作品」のフランス語版では、「ショックを与える」は「traumatiser = 心的外傷を与える」となっている）。『抱擁のかけら』でも同じことが起こる。マテオは映像を通してレナと再会し、彼女に触れようとする。それは苦痛であると同時に甘美な体験となるだろう。だがこの出会いは結局、出会い損ねに終わるしかない。なぜなら映像は過去の光の機械的複製であって、それのものではないからである。どれほど精巧な複製でも「本物であること」だけは決して複製できない。しかし時間を遡り、映像を通して母なるレナと出会い／出会い損ねたことで、マテオは生きる力と映画監督であることを取り戻し、未完成だった映画をついに完成させるのである。

執筆者について——

伊集院敬行（いじゅういんたかゆき） 1969年生まれ。現在、島根大学法文学部准教授。専攻=映像メディア論、デザイン論。主な論文に「ペドロ・アルモドバル『トーク・トゥ・ハー』の作中映画『縮みゆく恋人』とクールベの『世界の起源』」（『島大言語文化：島根大学法文学部紀要』第59号、2025年）がある。

【特集 映画と精神分析】

情動の唯物論的な露呈

——『チャーリーとチョコレート工場』の場合

遠藤 不比人

この原稿が活字化される頃にはすでに出版される予定の拙著『情動的唯物論——モダニズム／精神分析／脱構築』（小鳥遊書房、2025年）は、本来は不可視な情動が、文学や絵画テクストおよび精神分析的な症状において可視化、物質化、身体化する次第と詳細を読解するというか、むしろ、その手触り、テクスチュアリティをどこかロラン・バルト風に愛でながら触知する試みであるのだが、そこでは扱うことのなかった映画テクストについて同様の視覚的かつ触覚的な吟味をしてみたい。

『情動的唯物論』の眼目に触れるのならば、フロイトの『夢解釈』における「夢工作」と呼ばれる夢テクストの生産過程が議論の中核をなす。そこで理論化された「夢テクスト」は二重構造からなり、抑圧された無意識的情動が充満した「潜在内容」とその情動的強度が可視化された表象に書き換えられることによって構成される「顕在内容」がそれである。抑圧された前者の情動的強度は夢の主体にとって耐え難く不快であるゆえ、それが後者たる夢テクストの表層に浮上するためにはある種の偽装工作が要求される。前者の後者への書き換えとは偽装のことである。この不快な情動量は夢テクストの顕在的なナラティヴにおいては、内容（意味）が変更されなくてはならない（例えば父親への恐怖という情動内容と量がある連想から「馬」に偽装されるように）。しかしこの夢工作には構造的な瑕疵がある。不快で巨大な情動量を意味的に別のものに置き換えたとしても、その夢の表象には前者の強度が滲むよう宿すことになり、それは止み難く不気味で不穏な強度を帯びる。フロイトは心的な「量」を扱う分野を経済論と呼ぶが、夢工作の書き換え作業には、経済論的因素と意味論的因素の間に齟齬がある。大きな情動量を内容的に別の表象に置き換えて、この情動量の強度ゆえに、その表象の質量が不気味なまでに増大し、その内容以上の過剰がそこに滲み出る。フロイトはそれを「活字の比喩」を使用しながら、情動が「太文字化、肉文字化」するという。いわば、本来は不可視な情動が不気味な相貌で奇形化、物質化しながら可視化されるのだが、それを私は「情動の唯物論的露呈」と呼んだ（この本で扱った英国の心霊学研究の文脈では、「靈媒」の身体と言語は「不可視の魂の唯物論的露呈」となる）。

与えられた紙幅では理論的な記述より個別具体的な映画テクストを対象にすべきだろうから、ティム・バートン監督の『チャーリーとチョコレート工場』を扱うことにしておきたい。それは「映画と精神分析」をテーマにした大学のゼミでの学生の反応ゆえである。まさに無意識的情動の不気味な唯物論的露呈という点で、この映画テクストの映像が学生に与えた衝撃を眼前にした経験ゆえの選択である。主人公は歯科医たる厳父から抑圧された外傷的体験があり、その映像がハリウッド映画の文法通りに断片化されつつフラッシュバック的な映像として挿入される。しかし精神分析において真の外傷は、その根源的な表象不能性ゆえに物語的な欠如となる。その意味でこの映画のエディプス的主題において最も強烈な抑圧の対象は、ナラティヴにおいて完全なる不在と化した母親である。しかしフロイトによれば「抑圧されたものは回帰」する、しかし別の表象を通じて。この理論は『夢解釈』にあっては、例の書き換え＝偽装という夢作業となっていた。では、この映画にあって抑圧された（インセストタブーゆえに成人の主体が容認できない）母への情動はどのような相貌で回帰するのだろうか？ それはあの液状化した大量のチョコレートである。精神分析的な母子関係において最も根源的かつ特權的

な快楽の表象は母乳である。思えば、歯科医たる父親が過酷に禁じたのは甘い菓子を食すことであった（それは去勢を脅迫とした母への愛の禁止と等価である）。母乳＝菓子＝チョコレートという連想を通じて、母親への抑圧された情動は、正しく液状（母乳）化することで、映画テクストの表層に浮上した。あの大量の液状化した物体の不気味で過剰な質量は、不可視で巨大な情動量の通常の映像には包摶し切れぬ唯物論的な露呈である。同時に、あの不気味な液体は、どこか糞便じみた様相も呈していないいか。フロイトの教えに従えば、糞便とは、乳幼児が人生で最初に自らが作り出したものであり、それは黄金のごとき価値を有する母への最初の贈与品であった。母乳なる特權的表象が代表する「口唇期」の享楽が「肛門期」に移行するにつれ、腹腔内に溜める糞便はその後蓄財の対象たる金銭の無意識的表象となる。あの茶色の大量の液体は、形状としては糞便であるが、その精神分析的含意は、母への贈与を意味する黄金、あるいはその後蓄財をする金銭である。主人公がチョコレート製造に強迫的に傾注したその資本家的な衝動の強度と過剰、その異常な情動量が、あの不気味な映像として唯物論的に露出している。学生が受けた衝撃は、その精神分析的な過剰（とその唯物的な出来）に対する正しい反応であったと思う。

執筆者について——

遠藤 不比人(えんどうふひと) 1961年生まれ。現在、成蹊大学文学部教授。専攻=イギリス文学・批評理論・精神分析史。小社刊行の著書には、『カズオ・イシグロの世界』(2017年)がある。

【特集 映画と精神分析】

映画と精神分析の親密性

木原圭翔

「精神分析とは、セックスをしないことに同意した二人が互いに何を話すことができるかについてのものである」。精神分析家アダム・フィリップスによるこの簡潔でありながら、どこかユーモアをも漂わせる魅惑的な警句をはじめて知ったのは、彼とレオ・ベルサーニの共著『親密性』（檜垣立哉・宮澤由歌訳、洛北出版、2012年）を読んだ時であった。その後も複数の書物でこの言葉が引用されているのを見かけたが、精神分析を専門とする人々には、その特異な治療空間の核心を突く表現として強い印象を残すようだ。一方の映画研究者である私は、この文言を目撃した瞬間、これこそ「スクリューボール・コメディー」の定義ではないかと驚いてしまった。

1930-40年代のハリウッドで流行したこの映画ジャンルは、トーキーという新しい技術導入を背景に、登場人物たちの激しい言葉の応酬を特徴とする恋愛ドタバタ喜劇である。この時期のハリウッド業界にはプロダクション・コードと呼ばれる倫理規定があり、過剰な暴力や性描写などが著しく制限されていた。そのため、当初は反目していた主人公の男女二人は次第に惹かれ合いつつも、身体的な接触は可能な限り避け、何よりもセックスだけは絶対にしないという厳格な規則の下、恋愛成就という古典的ハリウッド映画の至上命題へと「会話」を通して突き進んでいく。スクリューボール・コメディーの傑作『ヒズ・ガール・フライデー』（1940）の冒頭で、ケーリー・グラント扮する元夫が馴れ馴れしく元妻であるロザリン・ラッセルの身体に触れようとする際に彼女が言い放つ「手をどけて！ 何してるので、整骨医（osteopath）のつもり？」という台詞は、単に安易な接触の禁止という事実を伝えているだけではない。それは同時に彼らの関係性がある種の治療状況と類似していることも示唆している。この映画の息もつかせぬマシンガントークは、概して穏やかに進行するであろう実際の精神分析的状況とは一見すると似ても似つかない。だがフィリップスの警句を補助線とするならば、かつて一緒に暮らしていた元夫婦でしかなしえない彼らの親密で軽快なやりとりは、自由連想というとめどない言葉の放出を肝とする精神分析の実践と思いのほか近いように思われる。

こうした指摘は、もちろん私が最初などではない。哲学者のスタンリー・カヴェルは『幸福の追求』（石原陽一郎訳、法政大学出版局、2022年）という書物において、このジャンルの諸作品を「再婚喜劇」と名付け直したうえで、映画と精神分析の関係を考察した極めて独創的な映画論を展開している。当時（1980年代）の映画研究は、ラカンの知見に基づく哲学的かつ理論的な映画観客論の全盛期だが、こうした状況を尻目に、「治療空間」という臨床現場と映画鑑賞との類似性に着目したカヴェルの思想は、今なお新鮮な視座を提供している。スクリューボール・コメディーの最高傑作『赤ちゃん教育』（1938）が、精神分析の最中にいる患者（ケーリー・グラント）と分析家（キャサリン・ヘップバーン）の物語だと聞けば多くの人が首を傾げるかもしれないが、彼らの奇妙なざこざはまさしく映画史上最も精神分析的な「遊びの空間」である（1）。

ハリウッドの大物プロデューサーであったサミュエル・ゴールドウィンが、「世界最高の愛の専門家」としてフロイトに映画製作の協力を打診してから今年（2025年）でちょうど100年。この有名な逸話は、にべもなく断ったフロイトの映画嫌いの証拠として引き合いに出されることが多いが、それと同じくらい重要なのは、当時からすでに映画が精神分析を渴望していたという事実である。実

際、精神分析家や精神科医が登場する映画は数多いし、一方で映画の精神分析的読解なるものは昔も今も巷に溢れている。にもかかわらず、映画と精神分析の間に見られる顕著な「親密性（intimacies）」の実態は未だ十分に検討されていない。かつて、ウィーンのフロイト博物館での講演に際してカヴェルはそのように主張していた（2）。両者の親密性の本質とは一体どのようなものなのか。主人公たちの際限のない（性的な）会話が充満するスクリューボール・コメディーというジャンルには、その解説のヒントが隠されているように思われる。

【注】

- (1) カヴェルの『赤ちゃん教育』論と精神分析（特にウィニコット）の関係については、以下の拙論で詳述した。木原圭翔「スタンリー・カヴェルの映画観客論と精神分析——映画という治療空間で遊ぶこと」『映像学』113号、日本映像学会、2025年、5–24頁。
- (2) Stanley Cavell, "The Image of the Psychoanalyst in Film," in *Cavell on Film*, ed. William Rothman (Albany: SUNY Press, 2005), 295–304.

執筆者について——

木原圭翔（きはらけいしうう） 1984年生まれ。専攻=映画研究。編著に『映画論の冒險者たち』（共編、東京大学出版会、2021年），主な論文に「『裏窓』、洗脳、テレビ——ヒッチコックのアイロニーと「純粹映画」」（『映画研究』19号、2024年）などがある。

【特集 映画と精神分析】

精神分析臨床で映画が登場したら

小林 陵

ある患者さんがこの映画が面白かったという話をしたとしよう。それだけでは情報が少ないため精神分析的臨床家は、どんな作品なのか、どんなところが面白かったのかを聞いていくだろう。よく分からないことがあれば質問するだろうし、珍しい話が出てきたとしたら、そのことについてどういうイメージを持っているのか聞くかもしれない。このとき、臨床家は一方で実際の映画の話として聞いているが、他方でそうした話を患者さんの心象風景の反映として聞いている。たとえば、ある映画のあらすじが語られたとしたら、それを親子の愛憎の話、強い人が弱い人を虐げる話、しつこい人に付きまとわれる話といったように一歩抽象化した水準で捉えて、それが患者さんの実際の人生や今ここでの治療関係とどのようにつながっているのかを考えていく。このように説明すると、随分、理屈っぽいことをしているのだなと思われるかもしれない。しかし、実際は毎日のようにそんなことをしているため、話を聞いていると自然に、強い人に虐げられる話が出てきたけれど最近の自分の解釈がきつすぎるのかもしれない、とか、しつこい人に付きまとわれる話というのは前回話していた別れた夫が家に来てしまつたことにつながるかもしれない、とか、そんなことが頭に浮かんでくるようになるのである。臨床家は面接中、そんな風に連想を膨らませながら話を聞いているが、それらをすべて患者さんに伝えるわけではない。そうして思いついた中でこの場で伝えることに意味がありそうだと思ったいくつかを実際に解釈として伝えるのである。

こうした話題で思い出されるのは、以前に参加した精神分析的心理療法のセミナーで、「患者さんに薦められた映画を観るかどうか問題」が熱心に議論されているのを聞いたことである。一般の方からしたら、そんなことどっちでもいい、と思われるかもしれない。しかし、一見するとどうでもいいようなことを、長々と真剣に議論しているのが精神分析的臨床家の面白いところだと言える。では、どうしてそんな議論が必要なのだろうか。

学派によってどのくらい強調するかは異なるものの、基本的には精神分析的臨床家は中立性を保ちながら患者さんの話を聞き、自分のこころに思い浮かぶことを利用して解釈をしていく。たとえば、臨床家が患者さんに薦められた映画を観なければいけないと思ったとする。もし実際に観たとしたら、臨床家は会っている面接時間以外に、多くの時間をその患者さんとの関係のために費やすことになる。そう考えてみると、この映画を観てほしいという訴えは、「もっと自分のために時間を使ってほしい」「もっと自分のことを知ろうとしてほしい」さらに言えば「もっと自分に愛情を与えてほしい」という訴えが背後に隠されているかもしれない。精神分析的臨床家には、何も考えずにその映画を観てしまったらそこまでかもしれないが、立ち止まって「どうしてこの患者さんは私にこの映画を薦めてきたのだろうか」と考えることが重要なだと考える人が多いのである。

別のパターンとして、勧められた映画を観て、その話を次回にしたとしよう。すると、患者さんは新たに別の映画を薦めてくるかもしれない。そうなると、臨床家側は次も観ざるをえなくなる。それが何度か重なると、臨床家にとって負担になるかもしれない。さらに、こうした状況が常態化したら、あるとき臨床家が勧めた映画を観てこなかったとき、患者さんは落胆し、怒りをあらわにするかもしれない。こうした状況は、気がついてみると、臨床家の方がまるで宿題をやってこなかった子どもの

ようであり、ひょっとしたら、患者さんと厳しかった母親との関係の反復となっているかもしれない。こんな風にその場のやりとりの背後で生じている意味について考えていくことが精神分析臨床では重要となる。

さて、ここで精神分析臨床における映画の扱いの話に戻ろう。精神分析に詳しい方であれば、先の私の説明を聞いて、夢の扱いと変わらないじゃないかと思われたかもしれない。そう、夢の扱いと変わらないのである。現代のイタリアの精神分析家アントニーノ・フェロは若い分析家たちへの助言として患者さんのあらゆる連想に「～という夢を見た」というフィルターをつけて聴くことを奨励している。つまり、現代の精神分析（特に対象関係論的な臨床）では、映画に限らず、過去の思い出であっても、職場の愚痴であっても、すべての連想を基本的に同じように夢を聴くような姿勢で聴いていくと言えるかもしれない。だとしたら、臨床場面において、夢の話と映画の話にどこか違いはあるのだろうか？　まず思いつく大きな違いとして、映画はその後で臨床家が作品を観られるということが挙げられるだろう。

あるとき、私が面接をしていた男性が週末に劇場で観た映画でとても感動して泣いたと語った。驚いたことに、私も週末にその映画を観て、感動して泣いてしまったのだった。私は嬉しくなり思わず「確かにあの映画は感動的でしたねえ」と言ってしまう。先ほど精神分析的臨床家は中立性を保とうとすると言ったものの、私自身の中立性はまだまだその程度なのである。私は彼にどんなところが感動的だったのかを聞いていった。彼は感想を色々と説明してくれた。ただ、私の印象では、というよりも、かなり多くの人がそう思うだろうが、その映画のテーマは「許し」だったが、彼の話からは「許し」についての話題がまったく出てこなかった。そして、これまでの面接の中で私が感じていた彼の課題は、まさに許せないことで自分の人生が進められないというものであった。しかし、毎回、猛烈な勢いで職場の元同僚に対する怒りをぶちまける彼に対して、私はそのことをうまく扱えないでいた。映画の感想を話し終わった彼に対して、私は「あの映画の主人公は最後に相手を許したのですよね」と伝えた。彼は少し沈黙してから、「確かにそうですね」と答えた。その日を境にして、面接では許しについて話し合えるようになっていった。もちろん、あの映画で感動したと話していた時点で、彼の内面で許しの問題を扱う準備が出来つつあったのだろう。ただ、もし私が映画を観ていなかつたら、そのことを取り上げることができず、私たちの面接の展開は異なるものになっただろう。また、彼の話が彼自身が見た夢のことだったとしたら、私はその背後にある「許し」の問題に気づくことができなかつたかもしれない。映画は夢のようなものでありながら、臨床家も観ることができるという点で大きく異なっている。当たり前であるが、患者さんが先週の月曜日に見た夢や、小学校時代にいじめられていた風景は、もうすでに存在しておらず、臨床家が目にすることができない。しかし、患者さんが語る映画の場合には、臨床家は実際に観ることができる。

言ってみれば、現代の精神分析臨床においては、映画は共有可能な夢なのである。

* 取り上げた臨床素材は守秘義務の関係から特定できないように大幅に改変しています。

執筆者について――

小林 陵（こばやしりょう） 2006年に東京国際大学大学院臨床心理学科博士前期課程卒業。現在横浜市立大学附属病院に勤務。臨床心理士、公認心理師、日本精神分析学会認定心理療法士。主な著書には、『シネパト

グラフィー 映画の精神分析』(共著, アルテスパブリッシング, 2025 年), 『悩める社会人のための精神分析からの処方箋』(岩崎学術出版社, 2025 年) がある。

【追悼 浅沼圭司】
浅沼圭司頌

——大胆にして小心、ダンディにしてシャイ

佐々木健一

その若い講師はよくとおる声で映画美学を講じられたが、学生の方を見ることはなく、視線は彼方に遊んでいた。シャイな方だった。

浅沼圭司先生は旧制から新制に変るころの年代の方だが、この世代の美学者たちは「曲者」ぞろいだった。望月登美子、木幡順三、川野洋、島本徹といった方々は、それぞれに個性的な思索を展開された。浅沼先生も例外ではない。先生には20点ほどの単著があるが、学説研究は一冊もない。近しいロラン・バルトやニーチェも研究対象というより、思索のためのつれあいだった。

その著作のレパートリーは多岐にわたる。美学の原論（『ゼロからの美学』、『制作について』）、映画の美学（『映画美学入門』、『映画学』、『映画のために』I-II）、記号論（『象徴と記号』）がメジャーな主題だが、晩年に向って特に好まれたのは物語と日常性である。藤沢周平や宮部みゆきを素材とする物語論は、意表を衝く。アカデミックな美学者でこれらを取り上げるひとは稀だろう。この選択は、奥さまが愛読しておられたのに興味を懷いたことによる、とうかがった。すなわち、アカデミズムの縛りからの自由の表明だ。ご自身の経験に立って自由に思索するというスタイルが、特に成城大学を退かれたあと鮮明になる。この大胆さこそが浅沼美学だ。この傾向は、そもそも映画を選択されたことのなかに潜んでいた。ときおり（或いは、しばしば）映画が藝術ジャンルとしては周辺的なものだという趣旨のことを口にされた。自虐的に聞こえるが、実は自負のことばでもあった、先生はこの自由と戯れてらした。すなわち「真剣さ」と裏腹である。学問的な厳格さの意識も強くおもちだった。例えば、『宮沢賢治の「序」を読む』の主題設定のなかにそれを読むことができる。この同郷の詩人に対して、先生は格別の思いを懷いてらした。賢治に即して美学することは、若き日の夢のようなものだったらしい。それを実現されたのは最晩年になって、周囲からの強い要望を受けてのことだった。だが、長年親しまれたその詩や物語の全体ではなく、対象を三つの「序」に絞られた。考察が恣意に流れないようにとの学問的な禁欲であり矜持と見られる。どれも長いテクストではない。しかし、そこにある断片的な思想、感情、語句を取り上げて、全作品と交響させる。そして、この詩人の最も重要な思想的、感性的なモチーフを浮かび上がらせている。「みんな」という位置取り（『きけわだつみの声』が参照される）、詩のなすべきことなしうること、盛岡弁のアクセントをとって聞こえてくる世界の声。エピグラフとして、ドイツ語でEine Phantasie im Abendと書かれている（「夕べの幻想」）。語句は賢治のもじり（「朝」を「夕べ」に置き換えた）だが、その「夕べ」にご自身の老年の意味を含ませた。このフレーズにはシューマンの声も聞こえる。おしゃれだ。

浅沼美学の主要動機：戯れ（あるいはテクスト）、パンタスマ（あるいは引用）、よそ、そして声。さらに、位相を異にするが、日常性も挙げておこう。

浅沼先生の文体で目立つのは、「～ではないだろうか」という述語である。どこか煮え切らない感じがしないでもない。しかしその真意は、「学問的な主張をするわけではありませんが、わたしはこう考えます」ということわりである。「尻切れとんぼに終わってしまった」「あいまいをきわめるこの

テクスト」などあとがきに繰り返される言葉に騙されてはいけない。それは個性を自認することばかりだ。晩年になるほどに、先生の思索はより自由に、より大胆になっていった。わたしが最も魅力を感じているのは上記の賢治論だが、ほかにすぐに思い出す著作がふたつある。ひとつは『物語と日常性』。ご自身の日常生活のなかから日常性という主題を汲み取られたところが面白い。とくに映画『トリノの馬』の記述がすばらしい。もうひとつは『制作について』である。ものを作る人間の活動全体のなかで藝術制作を考えようとしたもので、軽み志向の淺沼美学のなかでは重厚な大著である。その議論は多くの作例とともに運ばれる。わたしが驚いたのは、フロベール、V・ウルフ、ブルーストの語りの違いを語る一節だ。

何故かはわからないが、近頃、しきりと思い出されることがある。1995年夏、国際美学会議がフィンランドのラハティで開催された。先生は成城大学関係の若手研究者を率いて参加しておられた。或る晩、その成城グループの夕食に誘ってくださった。グループは大部屋に宿泊していて、夕食はパンやチーズ、ソーセージのようなものを買ってきて分かち合う、西洋風のコンビニ飯だった。この風変りなお招きは、とてもうれしかった。しかしいま、この晩の思い出はいささかの苦味が滲んでいる。会話がはずんだ、という記憶がないからだ。いまなら、先生にはお聞きしたいことが山ほどある。若手たちだってそうだったに相違ない。座をそのように弾ませることが、未熟なわたしにはできなかった。

執筆者について――

佐々木健一（ささきけんいち） 1943年生まれ。東京大学名誉教授。専攻＝美学。主な著書には、『せりふの構造』（講談社学術文庫、1994年）、『美学辞典』（東京大学出版会、1995年）、『美学への招待 増補版』（中公新書、2010年）などがある。

【追悼　浅沼圭司】

浅沼圭司先生を偲んで

津上英輔

1993年度から2000年度までの8年間、私は成城大学芸術学科の同僚として、浅沼先生と間近に接する幸運に恵まれた。それは師事の形ではなかったが、その後の私の生き方を変える、大きなできごとだった。先生は控えめさの奥に、堅い信念と高い矜持を持った方だった。会議や酒席をしばしば共にする中で、お人柄を人生の指針とさせていただいた。

先生は1996年から99年まで、美学会会長を務められた。学問と人望からして当然のことだったが、この学会の歴史上2つの点で画期的なことだった。まず、東大か京大の教授がこの任に就くのが長い慣習であった中、浅沼先生は私立大学教員初の会長に選出された。次に、映画研究に立脚した近・現代美学の研究者が伝統あるこの学会の代表者となることも、初めてのことだった。当時先生は謙遜されながらも、この2つの意義を自覚し、後進に新たな道を開いたことを、いささか自負しておられた。特に映画研究に関連して、それまで日本の美学界の常識であった、絵画や音楽を中心に置く芸術論から、映画を含めることによって論全体の軸をずらすことを目論んでおられた。その構想はご定年後に刊行された『ゼロからの美学』(2004年)に反映されている。本書に続き、先生はほとんど毎年のように本を書かれ、それは単著だけでも都合十指に余る(その大半は水声社刊だ)。怠惰な私は、いただいたご著書を拝読してからお礼を申し上げようとしている間に、新著が送られてきて、前著を受け取ったのかと怒られたことがある。

浅沼先生は大学院修士課程を終えるか終えないかの青年期に成城大学に着任され、2001年に定年を迎えるまで、実に45年ほどの長きに亘ってこの大学に勤務された。その中で文芸学部長を4年務められたが、私が成城大学に着任したのは、ちょうどそのときだった。教授会の議長として、教員たちの好き勝手な、ときには不規則な発言をも見事にさばきながら、てきぱきと議事を進めるお姿は、とても頼りがいがあった。次は学長にと、多くの教員が望んだが、きっぱりと固辞された。運営より研究に力を注ぎたいお心からだったと思うが、成城大学を憂えるお気持ちは人一倍強かった。成城には理念が欠如していると、個人的に何度もうかがったし、学内誌に寄稿もされた。

学生、特に大学院生からの敬愛はほとんど絶対的だった。教授在任中、毎年夏に軽井沢の寮で開かれた合宿勉強会は、ご定年後も場所を換えて長く行なわれたと聞いている。一時、浅沼ゼミ修了生の間で「すわ、浅沼」という言葉が流行ったそうだ。一朝事あらばすべてを擲って、全国から鎌倉ならぬ浅沼先生の許に馳せ参じる、そんな心意気を語ったものだ。しかし先生ご自身は徒党を組むことをひどく嫌われた。それが最も顕在化したのが、ご退職前の振舞だ。成城大学では、定年教員が最終講義を行なうのが通例なのだが、浅沼教授はそれを公にされなかった。普段の学部生向け講義の最終回に、ごく内輪の数人を招いたに過ぎなかった。私はその数人に加えていただく榮誉に浴したわけだが、そのわけを先生にうかがうと、集まる大勢の中に、義理で参加する人がいるのがいやだからと打ち明けてくださった。同じ思いは、ご他界後の葬儀に関して、ご家族に引き継がれた。

しかし先生は、決して乾いた理知一辺倒の方ではなかった。盛岡の中心部で育たれた幼少時代から現在のご家族のことまで、折に触れ私に親しく、大らかに語ってくださった。成城大学に着任して数年後、週刊誌『AERA』に毎号掲載される「現代の肖像」を愛読していた私は、先生がお話し下さっ

た内容と今のお姿から、向こう見ずにも、先生の肖像が書けそうな気がしますと申し上げたことがある。そのときの先生の反応をはっきり覚えていないのは、記憶に残るほど呆れたり嫌な顔をされたのではないからだろう。そこで私がとらえたと思った浅沼圭司の肖像には、妻と子を想う優しい家庭人として的一面が含まれていた。

その優しさを、先生は私にも惜しみなく注いでくださった。若く浅慮な同僚を寛大な目で見守り、私が失敗しても、正面からたしなめるより、感想のひと言で私の自覚を促してくださることが多かつた。私はそうして先生の広いお心に導かれて、何とか自分を律することができるようになった。やはり先生との出会いは、私の人生を変えた。

執筆者について——

津上英輔（つがみえいすけ） 1955年生まれ。現在、成城大学教授。専攻＝美学。主な著書には、『あじわいの構造——感性化時代の美学』（春秋社、2010年）、『危険な「美学」』（集英社インターナショナル、2019年）、『美学の練習』（春秋社、2022年）などがある。

【追悼　浅沼圭司】

浅沼圭司先生を追悼する

木村建哉

木村が浅沼圭司先生の死を知ったのは、お亡くなりになってから10日以上も経った10月半ばのことです。そのことを全く知らないままに、美学会の全国大会で会った浅沼先生の教え子の早川恭只さんと浅沼先生の体調がかなり悪いらしいという話をしたのは10月11日のことであったので、浅沼先生の死の知らせには激しい衝撃を受けました。まさか浅沼先生が既にお亡くなりになっているとは、全く考へてもいなかつたのです。

実は木村自身も、東京大学文学部美学芸術学科に在学中には浅沼先生（表記は浅沼だったかも知れません）の映画学の授業を受講し、また大学院ではロラン・バールトの『テクストの快楽』（*Le plaisir du texte*）をフランス語で読む授業にも出ていました（フランス語の初版の発行は1973年）。毎回1頁程度読み進めたのですが、浅沼先生のフランス語力は、本当に驚くべきレヴェルの高さでした。又、ロラン・バールトへの思い入れを、極めて熱く語られていたのも非常に印象深かったです。

2001年の第15回国際美学会議開催（会場は千葉県幕張の神田外語大学）を受諾する演説を、それに先立つ国際会議の場で、フランス語でなさったと聞いていますが、その圧倒的なフランス語力は間違いなく極めて強い説得力を持っていたことでしょう。

そして成城大学文芸学部芸術学科では、木村は映画学の担当教員として浅沼先生の後任であるのに（間に1年空いているのですが、その経緯についてはここでは書きません）、浅沼先生がお亡くなりになっていたことは兎に角驚きでした。

浅沼先生は著作の数も多く、何と20冊もの著書があり、木村はその全てを読んでいる訳ではないのですが、『映画学　その基本的問題点』（紀伊國屋書店、1993年）の様に、映画の本性を非常に鋭く詳細に分析した書籍や、『ロベール・ブレッソン研究　シネマの否定』（水声社、1999年）の様な、際立って具体的で個性的な作家論、『読書について』（水声社、1996年）の様な読書についてのかなり詳細、且つ具体的な論考、『ゼロからの美学』（勁草書房、2004年）に代表される美学についての極めて緻密と言って良い議論、『ロラン・バールトの味わい　交響するバールトとニーチェの歌』（水声社、2010年）の様な、バールトとニーチェに関する、細部まで目の行き届いた論考等々には、映画学研究者として、又美学者としての浅沼先生の非常に高くして行き届いた見識と洞察力が現れています。これは真似しようとして真似できる水準を遙かに超えた、正に驚くべきレヴェルの高さです。尚、浅沼先生には定家や宮澤賢治に関する著作もあるのですが、それらは木村の理解を些かに越えている為、ここでは言及しませんが、浅沼先生が取り上げる範囲の広さと対応力の高さには日々驚くばかりです。

尚、木村は、浅沼先生が監訳されたクリスチャン・メッツ『映画における意味作用に関する試論——映画記号学の基本問題』（水声社、2005年、この本での表記は浅沼圭司、因みに原書の刊行は1968年）では、「1　映画における現実感について」（21-39頁）の翻訳を担当したのですが、これについては、翻訳の作業が非常に遅くなってしまったということがあって、京都で開かれた美学会の全国大会でお目に掛かった時に、浅沼先生が立っていた私の右横を飛び膝蹴りしながら通り抜けるという、今となっても信じ難いことが有りましたが（因みに木村の近くに立っていた佐々木健一先生も驚かれていました），浅沼先生が何と仰っていたかは、余りの事に混乱していて、記憶が定かではありません。

ませんが、「小奴め、どうしてくれよう」といったことを仰っていたかと思うのですが、繰り返しますが木村の記憶は不確かです。又木村はこの時、浅沼先生は実は身体能力も非常に高いということにも驚きました。兎に角、走るスピードが有り得ない程に速いのです。メッツの翻訳に話を戻すと、訳語の統一に関してその後修正はありました（浅沼先生の「監訳者あとがき」によれば、訳語と用語の統一と用語対照表の作成は曾根幸子さんにより、早川恭只さんが手伝っているとのことです）、訳文そのものには修正は殆ど入っていません。

木村は今でも、浅沼圭司先生がお亡くなりになられたということをなかなか受け入れることが出来ずにいるのですが、御冥福をお祈り致します。

執筆者について——

木村建哉（きむらたつや） 1964年生まれ。現在、成城大学教授。小社刊行の訳書には、クリスチャン・メッツ『映画における意味作用に関する試論——映画記号学の基本問題』がある。

浅沼圭司の本

映画のために 1986 年
書物の現在（吉本隆明・蓮實重彦・清水徹との共著） 1989 年
映画のために II 1990 年
読書について 1996 年
思考の最前線——現代を読み解くための 20 のレッスン（谷内田浩正との共編著） 1997 年
ロベール・プレッソン研究——シネマの否定 1999 年
映ろひと戯れ——定家を読む 2000 年
映画における「語り」について——七人の映画作家の主題によるカプリッヂオ 2005 年
〈よそ〉の美学 2009 年
ロラン・バトルの味わい——交響するバトルとニーチェの歌 2010 年
昭和あるいは戯れるイメージ 2011 年
物語るイメージ——絵画、絵巻あるいは漫画そして写真、映画など 2013 年
制作について——模倣、表現、そして引用 2016 年
宮沢賢治の「序」を読む 2016 年
映画美学入門 2018 年
物語と日常——二つの映画と二つの物語の動機による四つの断章 2021 年
物語とはなにか 2007 年

【連載】

ローマのメチャクチャ小説

——本棚の片隅に 25

四方田犬彦

クラウディア・カルディナーレの逝去を知られたのは、奇しくも彼女の生まれ故郷であるチュニスだった。シチリア出身の湾岸鉄道の労働者の娘として、彼女はカルタゴに近い集落に生まれ、シチリア語とフランス語のなかで育った。イタリアの標準語にはなかなか馴染むことができず、若いころの出演作はいつも吹き替えだったという。

ヴィスコンティの『山猫』やフェリーニの『8 1/2』における、澁渁とした彼女の姿がただちに思い出のなかに蘇ってくる。ピエトロ・ジェルミの『刑事』にも出ていたなあ。田舎から出てきたメイドの役で、最後の最後まで予想がつかなかったけれども、実は女主人の喉を搔ききって殺した犯人だった。ええっ、こんな質素でキレイな人が凶悪殺人をしちゃうわけ？ と、驚いた記憶がある。彼女はほとんど喋っていなかったと記憶しているのだが、これはやっぱりイタリアの標準語が話せなかつたからかもしれない。

『刑事』は主題歌の「アモーレ・ミオ」が世界中で大ヒットしたから、知っている人も多い。しかし原作がカルロ・エミリオ・ガッダの『メルラーナ街の混沌たる殺人事件』という「推理小説」だと知っている人は少ないだろう。ましてやそれを読んだ人はもっと少ないはずである。わたしは、もう半世紀ほど前のことだが、千種堅さんが最初にこの作品を『メルラーナ街の怖るべき混乱』という題名で翻訳されたとき、ただちに挑戦してみた。ところがこれが難しい。何が何だかわからない。

ローマのテルミニ駅からちょっと歩いたあたり、下町のメルラーナ街のアパートで起きた殺人事件をめぐって、一人の刑事が奮戦して捜査するという話なのだが、次々と登場する人物たちがそれぞれに、いろいろなことを語り出す。地方訛りの強いイタリア語のなかに、ファシズム政権下のさまざまな社会的矛盾があちこちで浮かび上^{あなど}がってくる。同性愛。階級的貧困。孤児の養子縁組。不妊と不倫……。単なる犯人探しの物語だと侮っていると、五色の、いや七色の糸が絡み合ってしまうようで、まったく歯が立たない。後になってイタリア人がこの長編のことを、原題の *Quer pasticiaccio bruto de via Merulana* を簡単にして「パステイッチャッショ」と呼んでいることを知って、やっぱりそうだよなあと思った。千種さんは初訳では「混乱」、晩年の再訳では「混沌」と訳されたが、これは要するに「メチャクチャ」という意味である。

もう 30 年以上も前にこの国で勉強をしたことのあるわたしが漠然と感じていたのは、イタリアとは日本でいう関西（というか、正確には「畿内」）ではないだろうかということだった。自分の出身地の方言や料理の味付けに誇りをもち、それを生涯手放さないという点においてである。もっと簡単にいうと、ミラノが大阪の「きた」。ローマが「みなみ」。ジェノヴァが神戸。フィレンツェが京都で、ナポリが和歌山（プラス広島、鹿児島）。ブーリアのバリあたりが新宮という見立てである。こんなことを書くと東京のイタリア文学者に呆れかえられてしまうかもしれないが、北摂箕面で生まれた者の戲言だと思って、ご容赦いただきたい。

この見立てがあながち無根拠ではないと思うのは、そもそもガッダの長編の原題からして、英語ならば the に当たる定冠詞 quel が、堂々と quer で始まっているからだ。ガッダはもうハナから標準イタリア語の規範を無視している。ローマやナポリをアフリカだと呼んで憚らない北部、南北イタリア

の分離を主張するロンバルディア同盟の人たちならば、もうこの原題を眼にしただけで眉を顰めたり、恐れをなしてしまう人もいるだろう。ilをerと発音して恥じるところのないローマ人の息遣いが、そこには明確に窺われる。これは大阪弁だとしかいいようがない。

面白いのは、ガッダ本人がミラノっ子であり、学業も就職もずっとミラノであったことだ。原題のローマ臭さは、意図して仕組まれた言語的挑発であると考えていい。彼はあたかも外国語に向かい合うかのように、この小説を執筆したのである。読者は本文を読みだしてしばらくすると、イタリアにおける言語的多様性のただなかに突き落とされてしまうことになる。地方語ばかりではない。隠語、猥亵語、罵倒語のオンパレードだ。先にこの小説を「推理小説」と軽々しく呼んでみたが、それは表向きの話で、ミハイル・バフチンがもし読んでいたとしたら、ラブレー論など放り投げてガッダ論に挑戦していたのではないかと、ついつい空想してしまうほどである。

ジェルミのフィルムでは、最後に殺人犯人がCC演じるメイド、女主人からはアッサンタと呼ばれていた田舎娘ティーナだと判明することになっている。まあ、これは映画だから大衆向けにわかりやすくしただけの話で、原作では瀕死の父親のいる前で、いかにも無垢な田舎娘である彼女が、主人公の刑事の執拗な追及を受け、まさに追い詰められている場面で突然に幕切れとなる。終わっているというより、作者がもうチョイというところで意図的に未完のまま、読者の前に作品を提出してみせたという感が強い。何と憎らしいガッダ！ 要するにこの韻晦趣味に満ちた作者は推理小説作家の仮面を被っているだけの話で、日本でいうならば夢野久作が『ドグラマグラ』を探偵小説の触れ込みで刊行したのと同じ戦略である。

何年か前のことであったが、かつて東京のイタリア文化会館で館長を務めたジョルジョ・アミトーノ氏（現在はナポリ東洋語大学教授）とローマで落ち合い、彼の自宅近くにあるお気に入りのトラットリアで食事をしたことがあった。話がたまたまガッダに及んだとき、そういえばこの路地の先に大きく延びているのがメルラーナ街ですよと、彼がさりげなく教えてくれた。何ということだろう。わたしたちはあのメチャクチャ小説の舞台のすぐ間近で食事をしていたのだ。

この小説を二度にわたって翻訳された千種堅さんには、高田馬場の御宅で一度、手作りのスパゲッティを御馳走していただいた思い出があった。韓国文学翻訳家の安宇植さんといっしょである。何かのパーティでこのお二人が、イタリア韓国、どちらがうまいという話をされたことが切っ掛けで、ご招待を受けたのだ。

どうです、安先生。韓国料理もおいしいですが、イタリア料理もなかなかのものでしょうと、千種さんはニコニコとおっしゃる。この現代イタリア文学の驚異的な翻訳者は、その一方で職業的な占い師でもあり、四柱推命に関する専門書の著者としても名高い。これから運勢が気になるのでしたら、いつでも真面目な相談に乗りますよとのこと。

ガッダの長編のことは長い間、気になっておられたのだろう。四十歳くらいで初訳をされたが、最晩年にもう一度それに手を入れられた。現在、われわれが手にできる水声社版はこの再訳である。

ああ、翻訳家というのは、いつまでも経っても自分の翻訳に不充足を感じ、自分の息子の結婚式にあたってネクタイが歪んでいないかといったことに気を掛けるかのように、訳文に気遣い続けるものなのだ。こうした小説を人生の責務のように抱え込んでいる千種さんに敬意を感じるとともに、羨ましいと思った。

執筆者について——

四方田犬彦(よもたいぬひこ) 1953年、大阪府に生まれる。専攻=映画誌・比較文学。近著に『零落の賦』(作品社、2025年)、詩集に『チャーリー・ワッツ』(港の人、2025年)、小説に『戒厳』(講談社、2022年)、翻訳に『増補新版 パゾリーニ詩集』(みすず書房、2024年)。小社刊行の著書に、『増補新版 吉田健一頌』(共著、2003年)がある。

コメット通信（1-65号）総目次 2020-2025

第1号（2020年8月）

「力の過剰」としてのエクリチュール 郷原佳以
三木竹二：「あとがき」に加えて 木村妙子
見えないときに見える絵画 伊藤亜紗
花瓶をひとつ 浜田明範

【追悼・山崎勉】

夏の約束：山崎勉先生を追憶する 中村邦生

【連載】

『ジャパノラマ』編集にあたって：Books in Progress 1
閑根慶
コロンボから八雲へ：裸足で散歩1 西澤栄美子
『もうたくさんだ！』：校正刷の余白に1 鈴木宏

【特別付録】

ひとり遊び 桑原喜一

第2号（9月）

日常ということ 浅沼圭司
回帰する「過激な問いかけ」 小林康夫
革命家を職業とした女性 桑野隆
モーリス・ブランショの変貌 安原伸一朗
言語空間と絵画空間：絵画のなかの文字の場所 山梨俊夫
ウイルスと法 奥田若菜

【連載】

「私、彼らと、あれらと共にある、私。」：Books in Progress 2 井戸亮
2024年から2020年へ：裸足で散歩2 西澤栄美子
『拉致……コンクール……募集』：校正刷の余白に2 鈴木宏

【特別付録】

わたしの出版人生 小山光夫

第3号（10月）

燃えさかる空虚：ロートレアモンを読むブランショ 石井洋二郎
鹿島由紀子さんの句集『玫瑰』を読んで 森谷宇一
研究？ 批評？ 妄想？ 学問？：ひとりよがりの遍歴 高橋薰

【連載】

唯一のバフチン自伝：Books in Progress 3 板垣賢太
キーファーからドナルドへ：裸足で散歩3 西澤栄美子

【特別付録】

物語の余熱：「ブラック・ノート」抄1 中村邦生

第4号（11月）

【特集 新型コロナウィルス・パンデミック下の文学——海外から】
清浄と不浄 ジェラール・マセ
禁じられたアジア エリック・ファーユ
パリの空気 イト・ナガ
病という試練 アナイート・グリゴリヤン
舞い飛ぶウイルスへの覚書 オラシオ・カステジャーノス・モヤ

シリーズ「エコクリティシズム・コレクション」の想像力 野田研一
ARAKAWA から ISOZAKI へ：荒川徹さんの吉田秀和賞受賞に寄せて 沢山遼
夢のような物語 高山花子
Quarantine 高須次郎

【連載】

失われた旅を求めて：Books in Progress 4 廣瀬覚
原田マハからバルザックへ：裸足で散歩4 西澤栄美子

【特別付録】

【対話】いまこそ《人間》に過激に問い合わせる：コロナの時代を生き延びる Philosophical Dialogue 小林康夫×星野太

第5号（12月）

カンパネッラの心象風景と存立のよすが 澤井繁男
文学と彷徨の真理 伊藤亮太
「私」と「原郷」：「GENKYO 横尾忠則」展から 南雄介
マイケル・フリードを読む：『没入と演劇性——ディドロの時代の絵画と観者』をめぐって 筒井宏樹
コロナと宗教と経済 丹羽充

【連載】

人類学とパンデミック：Books in Progress 5 村山修亮
『オーシャンズ 11』から『ストーリー・オブ・マイライフわたしの若草物語』へ：裸足で散歩 5 西澤栄美子

いのちの絡まりあいに耳を傾ける 結城正美

「故郷」に向き合う実践としてのエコクリティシズム 喜納育江

象使いたちのあとを追って 波戸岡景太

拡散の文化へ 河野哲也

〈不透明な言葉〉の行方 山田悠介

文学に現れる環境のエージェンシー 芳賀浩一

惑乱させる風景 小谷一明

ことばによる「幻出」 湯本優希

第 6 号（2021 年 1 月）

【特集 〈内戦〉下のアメリカ】

ドナルド・トランプの神話学 武隈喜一
21世紀に「アメリカのデモクラシー」は可能か：分断の政治のあとに 毛利嘉孝
〈内戦〉を記録するヒップホップ 金澤智
『僕の大統領は黒人だった』と『アメリカの病』に観るアメリカの人種的分断 池田年穂

第 8 号（3 月）

【特集 1 ミケル・バルセロ】

【対話】《物質》の画家、ミケル・バルセロ 山梨俊夫×小林康夫
ミケル・バルセロ展の開催に寄せて 松田健児
マヨルカにバルセロを訪ねる 島袋道浩

【特集 2 『言語学のアヴァンギャルド』を読む】

「言語学」の外へ、あるいは脱領域の知的実践のかたち 阿部賢一
失われた〈情熱〉を求めて 小林耕二
忘れられていた言語学 橋本陽介

文化人類学（者）との出会い 金子遊

【連載】

英語から日本語へ：裸足で散歩 8 西澤栄美子
崩壊後のロシア、郊外の森と沼地のただ中で：Books in Progress 8 板垣賢太
小社刊行物の定価表示（外税表示）へのご理解のお願い：営業部便り 1 山口祐一

【特別付録】

物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 3 中村邦生

第 9 号（4 月）

【特集 うけがれゆくメキシコ文学】

受け継がれゆく文学帝国メキシコの遺産 寺尾隆吉
メキシコ映画のネットワーク：レオノーラ・キャリントン・マリア・フェリクス・ファン・ルルフォー三船敏郎 仁平ふくみ
雨の後のヨーロッパをはなれて：レオノーラ・キャリントンとエレナ・ボニアトウスカ 富田広樹

トンデモナサと明るさ：千石英世『地図と夢』 福間健二
「鈍色の戦後」 蓦沢剛巳

【連載】

半獣神の哲学者：Books in Progress 9 井戸亮

【連載】

翻訳のない世界：Books in Progress 6 関根慶
大八木監督から石川選手へ：裸足で散歩 6 西澤栄美子

第 7 号（2 月）

【特集 中平卓馬】

『中平卓馬論——来たるべき写真の極限を求めて』をめぐって 江澤健一郎
写真には記憶がない 鈴木創士
いま、『中平卓馬論』を読んで思うこと 宮本隆司
中平卓馬との年月 内田吉彦

ヴェルナツキイとソヴィエト・マルクス主義：『ノースフェーラ——惑星現象としての科学的思考』によせて 市川浩
感染症の時代を経験する：発疹チフス感染記 吉田早悠里
伊賀の山奥で 高須次郎

【連載】

フーコーの置き土産：Books in Progress 7 廣瀬覚
「わんわん物語」から「わんわん物語」へ：裸足で散歩 7 西澤栄美子

【特別付録】

物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 2 中村邦生

臨時増刊号（2 月）

【総特集 エコクリティシズムの現在地】

他者化せよ：エコクリティシズムの命題 野田研一

『虚無への供物』から「失われた書物」へ：裸足で散歩 9
西澤栄美子

第 10 号（5月）

【特集 『新型コロナウイルス感染症と人類学』を読む】
〈地球の慢性疾患〉とともに生き、考えるために 松嶋健
パンデミックとパンデミック性 美馬達哉
読者への開かれ 田中功起
あたたかいツッコミ 飯田淳子

【連載】

短歌から川柳へ：裸足で散歩 10 西澤栄美子

第 11 号（6月）

【特集 翻訳をめぐって】
'Foreign language' は「外国語」か？ 松田憲次郎
厄病神に導かれて 三枝大修
発見の悦び、評釈の愉しみ：『カラマーゾフの兄弟』を翻訳して 杉里直人

ある造語から 森元庸介
「生きていること」のアナロジー 水野友美子

【連載】

エリック・ロメールと 2 つの教育：Books in Progress 10
井戸亮
歌舞伎から新劇へ：裸足で散歩 11 西澤栄美子

【特別付録】

物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 5 中村邦生

第 12 号（7月）

【特集 ロベール・パンジェ】
散文によるひとり連歌のようなもの：『パッサカリア』芳川泰久
慎みと不遜：ロベール・パンジェをめぐって 堀千晶
優れた小説家は上手く破綻する 鈴木創士
想像（する／される）ラジオとしての小説家 佐々木敦

プランショあるいはレシの経験 千葉文夫
個人の危機と芸術：ハロルド・ローゼンバーグ『芸術の脱定義』をめぐって 勝俣涼
イランの水タバコの行方 谷憲一
文化人類学者と詩人のこと 金子遊

【連載】

ロシアのポストモダン小説：Books in Progress 11 板垣賢太

ショーケンからしおんへ：裸足で散歩 12 西澤栄美子

【特別付録】

物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 6 中村邦生

臨時増刊号（8月）

【総特集 没後 20 年 ピエール・クロソウスキイの思想をめぐって】
はじめに 須田永遠
クロソウスキイと歓待の原理、再び 國分功一郎
聖女テレサの介入：『パフォーメット』再訪 千葉文夫
至高の瞬間とシミュラークル 酒井健
読み手によるコミュニティ：「共犯者」の具体的様相
須田永遠
体験について 兼子正勝
クロソウスキイとスコラ神学的歓待論：ポルノスコラグラフ
ラフィーの神学 山内志朗
予見と行動、あるいはイメージの内乱 森元庸介
二重権力の「ユートピア」：クロソウスキイにおける倒錯としての価値転換 松本潤一郎
有罪性から共犯性へ：2021 年 5 月のクロソウスキイ・シンポジウムを終えて 大森晋輔

第 13 号（8月）

【特集 ヴィクトル・セガレン】
普遍文明人セガレン ク里斯チャン・ドゥメ
マオリの国 管啓次郎
セガレンにひびくもの 小沼純一
多様性の行方 渡辺諒
《セガレン著作集》全巻完結に寄せて 木下誠

【追悼 ク里斯チャン・ボルタンスキイ】

クリスチャン・ボルタンスキイの「来世」 南雄介
悲しみの浄化のために 湯沢英彦
生の儂さに抗う 香川檀
クリスチャン・ボルタンスキイと Lifetime 山田由佳子

【連載】

チャンドラーから北方へ：裸足で散歩 13 西澤栄美子

第 14 号（9月）

3 人のヴィリエ・ド・リラダン 宮下志朗

【特集 ミハイル・バフチ】
ミハイル・ミハイロヴィチ、あなたはいったいなにものですか？ 番場俊
バフチの哲学的源泉について私が推測する二、三の事柄 貝澤哉
バフチと日本近代哲学：1920 年代バフチの行為の

哲学と1930年代日本の哲学文化 佐々木寛
バフチン先生は何を学生たちに教えたのか：対話理論と
教育実践 田島充士
バフチン的〈対話主義〉の効用 桑野隆

【追悼 ジャン＝リュック・ナンシー】
微笑みを差し出しつつ…… 小林康夫
だれであれ「共に」 安原伸一朗
透明な点 伊藤潤一郎

【追悼 立花英裕】
あまりにも早い、その旅立ちに寄せて 中村隆之

【追悼 高橋透】
サイボーグの心を追い求めた哲学者 坂内太

【連載】
グラシリアノ・ハーモス『乾いた人びと』について：
Books in Progress 12 村山修亮
『赤毛のアン』から『更級日記』へ：裸足で散歩 14 西澤栄美子

【特別付録】
断簡を裝って 桑原喜一

第15号（10月）

【特集 第二次世界大戦下のプランショ】
第二次大戦期のフランスで執筆するということ 安原伸一朗
批評家になること、あるいは、消滅の始まり 郷原佳以
沈黙から沈黙へ 門間広明
はじまりのプランショ 石川学
プランショと歴史：1943年のいくつかの時評について
伊藤亮太
1942年のプランショ：第一次世界大戦の痕跡に向かって 高山花子

【連載】
やつぱりこれをやつてよかつた：Books in Progress 13 小泉直哉
妖怪から民主主義へ：裸足で散歩 15 西澤栄美子

【特別付録】
物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 7 中村邦生

第16号（11月）

【特集 浅沼圭司の仕事】
二筋の航線：厳密にして自由に 佐々木健一
緻密なしなやかさ：映画美学からカプリッヂへの道の

り 武田潔
〈よそ〉の美学者：パンタスマに佇む浅沼圭司 小田部胤久
成城大学浅沼ゼミの一員として：浅沼圭司先生の「講義」
月野木隆行

【連載】
パラタクシス、あべこべの詩学：Books in Progress 14 廣瀬覚
久が原からレイキャビクへ：裸足で散歩 16 西澤栄美子

【特別付録】
物語の余熱：「ブラック・ノート」抄 8 中村邦生

第17号（12月）

【特集 ロラン・バルトのセミナー草稿を読む】
準備としての人生、あるいは再制作 桑田光平
恋愛と教育 鈴木亘
片思いのこと：ロラン・バルトからクレール・ドゥニへ
須藤健太郎
バルト像の変遷 平田周
世界は降りかかるもののすべてである：あるいは驟雨に
関する変奏 松浦寿夫
Textes de jouissance 小林康夫

【連載】
ジャン＝ポール・ペルモンからルパン三世へ：裸足で
散歩 17 西澤栄美子
ルネサンス時代の〈セルフマネジメント術〉？：Books
in Progress 15 板垣賢太
トーハンさんからの「運賃協力金」の支払要請について：
営業部便り 2 山口祐一

第18号（2022年1月）

【特集 コロナ禍を生きる】
コロナのもたらすものは何か 白川昌生
花冠日乗異文 野村喜和夫
猫と五輪とふたりの小説家 堀千晶
ニューヨークでの新型コロナの日々 武隈喜一

【連載】
不確かなる彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 1 勝俣涼
さよなら、さよなら、さよなら！？：Books in Progress 16 井戸亮
ジャック・チボーからセラフィマ・マルコヴナ・アルス
カヤへ：裸足で散歩 18 西澤栄美子

第19号（2月）

【特集 ハンス・ベルメール】

「ベルメール作品と女性」に関する覚書 松岡佳世
二つの人形、二つのイメージ：ベルメールとカーアンの
対照性についての一考察 松井裕美
脱臼させられた〈解剖学のヴィーナス〉 香川檀
ベルメール覚書 小澤京子
ベルメール人形：「人の形」が「人間」を壊すまでの道
程 田中祐理子
オーヴァーラップ 森元庸介

【連載】

再組織化する彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 2 勝俣涼
美術と社会が切り結ぶところ：Books in Progress 17 関根慶
広沢虎造からジェーン・スーへ：裸足で散歩 19 西澤栄美子

第20号（3月）

【特集 ウクライナ侵攻の深層】

文学から見た帝国意識と独立志向：ウクライナのアイデンティティの起源 大野斉子
マリウポリ出身の画家クインジのことなど 中村唯史
フェイクニュースを信じるのはだれか 乗松亨平
「歴史の発火点」としてのウクライナ：なぜプーチンは
侵攻したか 武隈喜一

中之島美術館：愛される黒のゆくえ 加藤有希子
出版よもやまばなし：出版界にもしウクライナ国民の何
万分の一ほどの血を流す勇気があれば…… 高須次郎

【連載】

友としての本：本棚の片隅に 1 小林康夫
分割 - 複製の彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 3 勝俣涼
酒井順子から清少納言へ：裸足で散歩 20 西澤栄美子
再会するために：Books in Progress 18 村山修亮
ウクライナから遠くはなれて：校正刷の余白に 3 鈴木宏

第21号（4月）

【特集 ブラジル現代文学の輝き】

ブラジル文学の簡易版見取り図：日本語で読める作品を中心
に 武田千香
早すぎた魔術師、マリオ・ヂ・アンドラード 福嶋伸洋
荒野の薔薇の密かな革命：ジョアン・ギマランイス・ホ
ーザの文学 宮入亮
女性の視点を広めた3人のブラジル人作家 江口佳子

【祝！ 芸術選奨新人賞受賞】

山城知佳子の作品について：その近年の取り組みから
土屋誠一

【連載】

洞窟の壁に描かれた生命の痕跡：本棚の片隅に 2 鈴木球子
人新世の彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 4 勝俣涼
「美人画」から「社会画」へ：裸足で散歩 21 西澤栄美子
ショパン・ゴースト・ライター：Books in Progress 19 廣瀬覚
「核エスカレーション抑止」の幻：校正刷の余白に 4 鈴木宏

第22号（5月）

【特集 反戦のロシア】

戦争が創作の力を促している：失望のその後で 高柳聰子
それでも詩は生まれていく：ウクライナ戦争下のミュージシャンと詩人 鈴木正美
送られなかった手紙 アナイート・グリゴリヤン

【祝！ 芸術選奨受賞】

鷹野隆大の写真の教え：2021年度芸術選奨受賞の報に接して 新城郁夫

【連載】

キッキンから広がる歴史：本棚の片隅に 3 河村彩
交換される彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 5 勝俣涼
「アガサ・クリスティー賞」から「本屋大賞」へ：裸足で散歩 22 西澤栄美子
哀・おぼえていますか：Books in Progress 20 小泉直哉

【特別付録】

ホロコーストとナクバについて 小森謙一郎

第23号（6月）

エミリスとジョン・ケアリ：私のオックスフォード 齋藤衛
精読による読解：『ローリーの「シンシア』』と二つの発見 櫻井正一郎

【特集 ゲルハルト・リヒターの絵画的詩学】

美術と視覚文化：ゲルハルト・リヒターによるイメージの再生産 井口壽乃
ゲルハルト・リヒターと「炎の氷」 仲間裕子

ビルケナウの音楽：リヒターの《黒・赤・金》（1999年）
についての覚え書き 浅沼敬子
ある単独者の死：リヒターとボイス 水野俊
階段の上の小さなアトリエ 白川昌生
6月5日、1991年 杉田敦
[対話] 絵画空間とリアリティ 建畠哲×山梨俊夫

【連載】

ミステリの女王アガサ・クリスティー vs 詩学の帝王ジエラール・ジュネット：本棚の片隅に4 松田憲次郎
受傷した彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー6 勝俣涼
ファティマ、辻公園のアルジェリア女たち：Books in Progress 21 井戸亮
『93年』から『ヴァンデ戦争：フランス革命を問いかず』
へ：裸足で散歩 23 西澤栄美子
地獄から別の地獄へ……：校正刷の余白に5 鈴木宏

第24号（7月）

もうひとつの〈エデンの園〉：ルイーズ・グリック『野性のアイリス』の世界 岩崎宗治
書店とは都市のようなもの 久禮亮太

【追悼 後藤克寛】

後藤克寛さんの思い出 森下紀夫

【特集 パスカル・キニャール】

微笑みの跡 パスカル・キニャール
随想礼讃：パスカル・キニャールという駿馬にまたがつて引き回されることの愉悦 澤田直
チエロをまえに 小沼純一
キニャールをめぐる偶感・私感 山梨俊夫
危険なエクリチュール：パスカル・キニャール〈最後の王国〉 桑田光平
パスカル・キニャールという謎 小川美登里

【連載】

ツェッペリンはなぜブルース・ロックではないのか：本棚の片隅に5 鈴木雅雄
賦活される彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー7 勝俣涼
『私は弾劾する』から『欧州の排外主義とナショナリズム』
へ：裸足で散歩 24 西澤栄美子
スター・リン時代の小説家と科学者たち：Books in Progress 22 板垣賢太

第25号（8月）

精霊舟：安田章一郎さんの学問 櫻井正一郎

【特集 中村邦生のフィクションの仕事】

フィクションへの存在論的誘惑 芳川泰久
諧謔の水 平井杏子
『幽明譚』・『ブラック・ノート抄』あるいは「歴史の天使」
千葉一幹
廃物たちのいるところ 結城正美
資料番号 2020-02-L15:H・J 書簡（笠間保宛） 北條勝貴

【連載】

感じるイメージ、考えるイメージ：本棚の片隅に6 郷原佳以
記号の物質化、あるいは印刷・彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー8 勝俣涼
藤山寛美から藤山直美へ：裸足で散歩 25 西澤栄美子
DDについて私が知っている二、三の事柄：Books in Progress 23 小泉直哉

第26号（9月）

【飯村隆彦追悼特集】

忘れられない作品 今井祝雄
飯村隆彦：芸術としての映像の探究〈言葉、身体性、映像・イメージ〉 相内啓司
時をフィードバックする友、飯村隆彦 河合政之
飯村隆彦が残してくれたもの 瀧健太郎
飯村隆彦の思い出 飯村二郎

身体障害を「哲学」するということ：ジル・ドゥルーズを一つのきっかけとして 辰巳一輝

【連載】

翻訳、この途方もない営み：本棚の片隅に7 星野太
意味×無意味の彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー9 勝俣涼
『マリアビートル』から『BULLET TRAIN』へ：裸足で散歩 26 西澤栄美子
せずにすめばありがたい？——「監査文化」について：
Books in Progress 24 村山修亮

第27号（10月）

【社会のなかの現代美術／現代美術のなかの社会：《現代美術スタディーズ》刊行開始記念特集】

[対話] 1980年代美術を考える 島敦彦×山梨俊夫
ロバート・ライマン：白の絵画 林寿美
布と絵の駆け引き：むらたちひろ個展「beyond」に寄せて 鮎江秀樹
「パブリック」とは誰を指すのか：1980年代末から90年代半ばにかけてのパブリック・アート批評 松本理沙

美術における物質的次元：山梨俊夫著『現代美術の誕生と変容』をめぐって 北澤憲昭

【連載】

湖のユートピア：本棚の片隅に 8 堀千晶
仮装する彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 10 勝俣涼
《ラス・メニーナス》から《フォリーユ・ベルジェールのバー》へ：裸足で散歩 27 西澤栄美子
サイエンスライターの誕生：Books in Progress 24 廣瀬覚

【特別付録】

観音移動：旅のみやげ 1 野村喜和夫
変声譚 1 中村邦生

第 28 号（11 月）

いざ地球の反対側へ 竹田孝一
Paris, 13-17/10/2022 千種さつき
統一教会とアマゾン：出版よもやま話 2 高須次郎

【追悼 志村正雄】

文を楽しみ、文学に恋する 矢口裕子

【連載】

汚穢としての芸術：本棚の片隅に 9 杉田敦
浸食の彫刻：コンテンポラリー・スカルプチャー 11 勝俣涼
『麦秋』から『窓辺にて』へ：裸足で散歩 28 西澤栄美子
リベラルアーツと自然科学：Books in progress 25 井戸亮

【特別付録】

死者の砂：旅のみやげ 2 野村喜和夫

第 29 号（12 月）

「ニホンジン」と「日本人」：翻訳という対話 竹田千香
Viva Brazil! 竹田孝一

【特集 シュルレアリスム再訪】

『シュルレアリスムへの旅』余滴 野村喜和夫
ブルトンとヴァシェのランボー体験 後藤美和子
謎は、解決ではなく、稼働させるものである：JCG の思い出に 齋藤哲也
ブルトンからの挑戦状、あるいは暗号解読の誘い 前之園望
目立たないシュルレアリストについて語るということ 鈴木雅雄
マン・レイ夫人との思い出 松田和子

【連載】

ジャームッシュからオハラまで（瀧口修造経由？）：本棚の片隅に 10 松井茂
転位する「彫刻」：コンテンポラリー・スカルプチャー 12 勝俣涼
《イシドール・デュカスの謎》から《フェルー通り》へ：裸足で散歩 29 西澤栄美子
ユダヤ人迫害とパレスチナ問題をともに語るために：Books in Progress 26 板垣賢太

【特別付録】

変声譚 2 中村邦生

第 30 号（2023 年 1 月）

【特集 デリダ・精神分析・記憶】
「理論」の身分：ジャック・デリダ著『絵葉書 II』の刊行に寄せて 原和之
講義録『生死』と『絵葉書 II』をめぐって 吉松覚
フロイトの夢を見る哲学者：ジャック・デリダと精神分析 工藤顕太
記憶と名前：ド・マンとデリダの「メモワール」 郷原佳以
ヘーゲルの記憶論とその脱構築的読解 小原拓磨
『メモワール』の記憶と約束 宮崎裕助

【連載】

「感覚合成態」の芸術論——フロレンスキイ『逆遠近法の詩学——芸術・言語論集』をめぐって：本棚の片隅に 11 野田研一

【特別付録】

崖の下のララ：旅のみやげ 3 野村喜和夫

第 31 号（2 月）

ルイ＝フェルディナン・セリヌの『戦争』：偶然と幸福 堀千晶
T. S. エリオットの“Medium”をめぐる科学と靈媒の文脈について 井上和樹
BOA SORTE（幸運を願って） 竹田孝一

【特集 ドン・デリーロの作品世界】

ユーモアは言語を越えるか：ドン・デリーロ『ホワイトノイズ』を訳して 都甲幸治
『ホワイトノイズ』への誘い：ドン・デリーロと笑い 日吉信貴
新人作家としてのドン・デリーロ：1970 年代の初期小説群について 矢倉喬士
デビュー作『アメリカーナ』をふりかえる 日野原慶

【連載】

言語学者ヤコブソンと芸術理論家タイゲ：本棚の片隅に
12 桑野隆
『タルプの花』と公園：Books in Progress 27 村山修亮

【特別付録】

変声譚 3 中村邦生

第 32 号（3月）

清しさを生きる：阪森郁代の歌 櫻井正一郎

【祝 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞】

『谷崎潤一郎と映画の存在論』を推す 山中剛史

【特集 ラテンアメリカ文学の新たな展望】

「辺境」からの文学 大西亮
数珠つなぎ キューバ小説の黄金郷 山辺弦
文学と歴史の（再）領有 浜田和範
『フィクションのエル・ドラード』第30巻刊行に寄せて
寺尾隆吉

【連載】

ミニマル音楽を捉える様々な視点とその可能性：ミニマ
ル音楽の拡散と変容 1 高橋智子

【特別付録】

歌物語あるいは浴槽：旅のみやげ 4 野村喜和夫

第 33 号（4月）

【祝！ 第4回大岡信賞受賞】
野村喜和夫の詩業：「肌理」の詩人から「ひかり」の詩
人へ 福田拓也

【特集 ブランショ・バタイユ・ポーラン】

常套句の振動と消滅：ポーランとブランショ 郷原佳以
すれ違った二人：ジャン・ポーランとモーリス・ブラン
ショ 安原伸一朗
「間違った」友情のために：バタイユとポーラン 岩野
卓司
ポーランとデリダ 若森栄樹
来るべきポーラン研究のために 柚原直文

【連載】

野生の本を求めて：本棚の片隅に 12 中村隆之
様式としてのミニマル音楽：ミニマル音楽の拡散と変容
2 高橋智子
ゼロの数だけ抱きしめて：Books in Progress 28 小泉直
哉

【特別付録】

変声譚 4 中村邦生
映画前史と仮想のイメージ：アート・フィルム 1 金子
遊

第 34 号（5月）

インフラストラクチャー・ディストピア 難波美芸
ウクライナ侵攻後のロシア演劇をめぐって 岩田貴
吉田喜重監督への〈借り〉を返そうと…… 小林康夫
デリダ『絵葉書』II の翻訳の新しさについて 若森栄樹

【連載】

輸入しこねた〈身体の反乱〉——村山知義とダンス：
本棚の片隅に 13 香川檀
ポスト・ミニマル音楽とポストミニマル音楽：ミニマル
音楽の拡散と変容 3 高橋智子

【特別付録】

ニューヨークのランボー：旅のみやげ 5 野村喜和夫
初期映画からアヴァンギャルドへ：アート・フィルム 2
金子遊

第 35 号（6月）

過激な《慎ましさ》：近藤譲の音楽をめぐって 近藤譲
×小林康夫「対話」
ローレンス・ウィナーの「fait accompli」について 大
澤慶久

【追悼 フィリップ・ソレルス／福間健二】

ソレルス とおくから PARADIS へ 小沼純一
フィリップ・ソレルスと大江健三郎 三ツ堀広一郎
フィリップ・ソレルスの孤独な戦い 阿部静子
兄よ、フクマよ、ありがとう！ 千石英世
今も、福間君と呼んでいる 桑原喜一

【特集 AI と人文学】

AI はツールか？ 井上隆史
人工知能は「塩吹き臼」なのか？ 千野帽子
Racter の方へ 杉田敦
文学とイノベーション アントワーヌ・コンパニヨン

【連載】

クラチュロスと自由：本棚の片隅に 14 芳川泰久
反復のための反復——ジャジュークの音楽から聴こえて
きたもの：ミニマル音楽の拡散と変容 4 高橋智子
アルバースの教え：Books in Progress 29 関根慶

【特別付録】

変声譚 5 中村邦生

イタリアの未来派と映画：アート・フィルム 3 金子遊

第 36 号（7月）

- 【特集 美術と教育：バウハウス／ブラックマウンテン・カレッジから】
ネヴァー・エンディング・ストーリー 松浦寿夫
バウハウスのアルバースとモホイ＝ナジ：構成主義絵画
井口壽乃
父祖の地、あるいは母国ドイツ：教育者としてのアルバースとボイス 水野俊
「目を開く」ために：ジョセフ＆アニ・アルバース財団の活動 林寿美
陶冶と創造の時：COVID-19 と美大教育 鮎江秀樹
美術教育とは何か 小澤基弘

【連載】

- 近代へのまなざし：本棚の片隅に 15 山梨俊夫
ポピュラー音楽とミニマル音楽：ミニマル音楽の拡散と変容 5 高橋智子

【特別付録】

- 塔の7日間：旅のみやげ 6 野村喜和夫
絶対映画とヴィジュアル・ミュージック：アート・フィルム 4 金子遊

第 37 号（8月）

- ロベール・パンジェの秘かな愉しみ 堀千晶
カトリック聖職者の支援によって生まれた州内初の LGBT 団体：メキシコ北東部コアウイラ州サルティヨの事例 上村淳志
ミラン・クンデラと「故郷」 赤塚若樹

【連載】

- 無重力の思想：本棚の片隅に 16 沢山遼
パンクロックとミニマル音楽——リース・チャタム：ミニマル音楽の拡散と変容 高橋智子
小さき人びと——折々の肖像：Books in Progress 30 井戸亮

【特別付録】

- 変声譚 6 中村邦生

第 38 号（9月）

- 【特集 浦雅春の人と仕事】
名訳は読み継がれていく 桑野隆
浦さん、あれこれ 木村妙子
届かない手紙 伊藤倫
むきだしの石：林武史の作品世界 森田一
ルネ・シャール、詩の「大地」 野村喜和夫×桑田光平

【対話】

- 【連載】
パンクロックとミニマル音楽——グレン・プランカ：ミニマル音楽の拡散と変容 7 高橋智子
謎多き騎馬民族ハザール：Books in Progress 31 板垣賢太

【特別付録】

- 夜なき夜：旅のみやげ 7 野村喜和夫

第 39 号（10月）

- 蜂起から脱走へ？ 杉田敦
ツキノワグマのいる／いない世界で 北川真紀

【特集 ルイ・イエルムスレウ】

- 何を言語と認めるか：イエルムスレウ言語素論の内在主義について 平田公威
イエルムスレウとデリダ：言語素論と原エクリチュール 小川歩人
フェリックス・ガタリにおけるイエルムスレウ言語理論の展開 山森裕毅

【連載】

- 仮設的（または暫定的）な絵画（Provisional Painting）と、マイクロポップ、そしてアノーマリー：絵画のモダン、ポストモダンのあとで 1 桦田倫広
(非) 人間的時間を求めて：本棚の片隅に 17 桑田光平
ジュリアス・イーストマンのミニマリズム（1）：イーストマンの生涯——ミニマル音楽の拡散と変容 8 高橋智子
声の聞き方：Books in Progress 32 村山修亮

【特別付録】

- 変声譚 7 中村邦生
暗黒巡り 桑原喜一

第 40 号（11月）

- 【特集 アラン・バディウ】
バディウの著作とその背景について 近藤和敬
過剰の脱共有：『主体の理論』から『メタ政治摘要』までのバディウ政治論瞥見 松本潤一郎
バディウの芸術論と「併走者」たち 武田宙也
アラン・バディウ書誌抄

【連載】

- ジュリアス・イーストマンのミニマリズム（2）——パーソナルなミニマル音楽：ミニマル音楽の拡散と変容 9 高橋智子

第 41 号（12 月）

プランショ、ジロドウ、サルトル：感性の問題 ク里斯
トフ・ビダン

【特集 想起と記憶】

メモリー・スタディーズの現在 山名淳
アスマン夫妻の記憶論：集合的記憶論のメディア論的軽
回 安川晴基
荒ぶる過去と対峙する：カズオ・イシグロの記憶の諸相
三村尚央
もう一つの記憶アート：アンゼルム・キーファーの〈鉛
の本〉 香川檀
ジャック・デリダ『メモワール』の記憶論 小原拓磨
ロサンゼルスの、ある記憶＝ミュージアム 伊藤博明
戦争および敗戦をめぐるトラウマとお笑い文化：ザ・ド
リフターズのコントを事例として 角尾宣信

【連載】

ロゴスからの解放——ウリポとケインの意外な共鳴：本
棚の片隅に 18 關智子
近年のスティーヴ・ライヒの音楽：ミニマル音楽の拡散
と変容 10 高橋智子

第 42 号（2024 年 1 月）

中国杭州詩祭報告 野村喜和夫

【特集 ジャック・ランシェール】

〈窓〉とフィクション：ジャック・ランシェール『文学
の政治』の余白に 森本淳生
「洗練」とは何か 市田良彦
あれか、これか 熊谷謙介
非形而上学性とパフォーマティヴィティ：ランシェール
美学瞥見 鈴木亘

【連載】

生命の建築：本棚の片隅に 19 後藤武
近年のフィリップ・グラスの音楽——ミニマル音楽から
オーケストラ音楽へ：ミニマル音楽の拡散と変容 11
高橋智子
三瀬夏之介作品の形式について：絵画のモダン、ポスト
モダンのあとで 2 柿田倫広

第 43 号（2 月）

世界を切り／開く：白井美穂と豊嶋康子の個展から 沢
山遼
戦時下のロシア演劇：2022／2023 年シーズン 岩田貴
いまこそペレックを再読しよう 松井茂
彫刻という、物言わぬ語り：2023 年、ニューヨークで
の体験から 勝俣涼

【連載】

記憶の彼方へ：本棚の片隅に 20 伊藤博明
アメリカ以外のミニマル音楽の動向 ミニマル音楽の拡
散と変容 12 高橋智子

第 44 号（3 月）

【特集 ニコラ・ブリオーの思想的可能性】

ある関係的風景のラフスケッチ 辻憲行
「記号航海士」としてのアーティスト 武田宙也
関係性、けれどもグリッサンの…… 杉田敦

第 45 号（4 月）

【特集 イタリアと日本の前衛芸術をめぐって】

前衛と投資？：ジャコモ・バッラの家訪問 鮎江秀樹
写真のブレをめぐって：『プロヴォーク』の写真家たち，
未来派の写真家たち 角田かるあ

【追悼 斎藤衛】

「大事なのは人だ」 櫻井正一郎

【連載】

落合多武の近年の絵画作品について——絵画のモダン，
ポストモダンのあとで 3 柿田倫広
ブックフェア《邂逅の本棚——水声社の本》に寄せて：
営業部便り 2 山口祐一+村山修亮

第 46 号（5 月）

【特集 吉田克朗 人と作品】

半透明の影：吉田克朗と「もの派」の超克 勝俣涼
吉田克朗さんの記憶 山梨俊夫

【祝！ AICT 演劇評論賞受賞】

今日の戦争は演劇によって表象できるか：『戦争と劇場
——第一次大戦とフランス演劇』をめぐって 横山義
志
戯れて曲がるイギリスの戯曲：『逸脱と侵犯——サラ・
ケインのドラマトゥルギー』をめぐって 小田島創志

【連載】

『叢書・二十世紀ロシア文化史再考』最後の一冊：Books
in Progress 33 板垣賢太

第 47 号（6 月）

【特集 野村喜和夫の小説を読む】

世界の無意識に触れる 野村喜和夫×星野智幸 [対話]
〈歩き〉のディスクール：野村喜和夫の『観音移動』に
ついて 中村邦生
この世への二度目の誕生 桑田光平

シユール小説は口語自由詩の夢を見るか 森川雅美

【追悼 高橋巖】

高橋巖氏を想って 中谷三恵子

【追悼 川崎三木男】

魂の旅人、ミッキオの海 武田好史

第 48 号 (7月)

【特集 アンチ・ダンスとは何か】

「アンチ・ダンス」と無為 國吉和子

こまのようす 松田正隆

ズラす身振り、あわせの振舞い 砂連尾理

私にとってのアンチ・ダンス 安藤朋子

【追悼 ヘレン・ヴェンドラー】

「人が息をし、見るかぎり、この詩は生き、そなたに生
命を与える」佐藤亨

鍊金術説明の難しさ：ある放送局のディレクターとの対
話 澤井繁男

ロシア文化の現在：モスクワ生活編 伊藤渝

第 49 号 (8月)

M+：香港の新たなデザインミュージアム 暮沢剛巳

【ロシア演劇の現在】

亡命ロシア演劇 岩田貴

ドキュメンタリー演劇と「愛國劇」 伊藤渝

第 50 号 (9月)

【特集 シュルレアリスムと映画】

アルトートブニュエル 四方田犬彦

シュルレアリスム宣言百周年と映画：起源のエピソード
塚原史

なんかたのしそうな「映画」：シュルレアリスムの映画
的実践 齊藤哲也

トワイянにおけるジェンダーとセクシャリティ：ジェ
ンダーへの反抗と芸術的理念の外で 大平陽一

痙攣するロトスコープ：シュルレアリスムと映画／アニ
メーション 岩崎宏俊

【連載】

ポスト＝メディアム・コンディションにおける絵画につ
いて その1：絵画のモダン、ポストモダンのあとで
4 樹田倫広

第 51 号 (10月)

【特集 今井祝雄】

物体と光の関係 加藤瑞穂

接触的映像：今井祝雄の映像作品の時間を考える 浅沼
敬子

限らない世界：今井祝雄の芸術について 大島徹也

第 52 号 (11月)

音楽を聴くとき：ドゥルーズ＝ガタリの音楽論再読に向
けて 平田公威

文学社会学への感謝：ランソンからサピロへ 関大聰
ハン・ガンの文学と美術：歴史と現実への感覚を開く
権祥海

【追悼 田中淳一】

1971年の夏あるいは田中淳一先生のこと 朝吹亮二
規格外の翻訳を生んだ比類なき個性 塩塚秀一郎
回転扉とイマージュ 郷原佳以

第 53 号 (12月)

【特集 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン】

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン、見ることへの細心
さ 岡本源太

『イメージの前で』から『われわれが見るもの、われわ
れを見つめるもの』へ 江澤健一郎

隕石の墜落 郷原佳以

複製技術時代の美術アルバム：ディディ＝ユベルマンの
マルロー論 荒原邦博

ニンファ論をめぐって、あるいは饅汁文体×ディディ＝
ユベルマン節 伊藤博明

【連載】

扉は開かれているか、閉じられているかでなければなら
ない：本棚の片隅に 21 松浦寿夫

第 54 号 (2025年1月)

脳の無意識／AIの無意識 久保田泰考

『チャイナタウン』シナリオ分析：「チェーホフの銃」は
発射されたか 田口仁

東アジアの近代を美術でたどるには 吳孟晋

越境する「線」：アメリカ滞在を手がかりに 勝俣涼

【連載】

2000年代マンガ論の集大成：本棚の片隅に 22 夏目房
之介

第 55 号 (2月)

絵本展の可能性：板橋区立美術館での試み 松岡希代子

【特集 ドゥルーズと詩】

俳句はポップ・ポエム？：耕衣ナマズとドゥルーズ哲学
篠原資明

ドゥルーズと音韻論 檜垣立哉
後半三十九分、紅葉走る、紅葉走る：ドゥルーズと詩、
私の実作例に即して 野村喜和夫
賽、鯨、襲：ドゥルーズのマラルメ読解 堀千晶

【本棚の片隅に】
読書の下に潜むもの 大池惣太郎

【連載】
ポスト＝メディアム・コンディションにおける絵画について その2：絵画のモダン、ポストモダンのあとに
5 榎田倫広

第 56 号（3月）
すべてを「ケア」と呼んでしまう前に 田村美由紀

【特集 ひきこもりの人類学】
フランスにおいて「ひきこもり」とは何か？ 古橋忠晃
「ひきこもり」と家族について考える 堀口佐知子
ひきこもり臨床とジャネ 蓮澤優

【連載】
なぜ「制度」を「使う」と言わねばならないか？——ガタリとリンクスを絡めて考える：本棚の片隅に 24 三脇康生

第 57 号（4月）
【特集 アフリカ哲学／文学】
未来は過去から生み出される 中村隆之
〈普遍的なもの〉の編み直し：スレイマン・バシル・ジャニュのリトル・ホープ 福島亮
夢見るアフリカ：アフリカン・スペキュラティヴ・フィクションの展開 粟飯原文子
息の哲学 橋本栄莉
哲学の転生、星々のアフリカ 真島一郎

第 58 号（5月）
ナンセンスコメディのなかへ：制度による臨床の風景
橋本和樹

【特集 オルダス・ハクスリー】
ハクスリーが描いた優生学的ユートピア／ディストピア：『すばらしい新世界』と生殖の未来 加藤めぐみ
「あとは沈黙」：ハクスリーが描く音の世界について 泉順子
オルダス・ハクスリーと『ジェーン・エア』：そのさきにある複数の女性たち 猪熊恵子
オルダス・ハクスリーとモダニズム 秦邦生
オルダス・ハクスリーと人類学 小澤央

第 59 号（6月）
引き継がれる諷刺漫画のアクチュアリティ ヤマト・デヴィッド

【特集 笑いを学問する】
笑い学ミニミニ小史 森下伸也
『笑いの哲学』その後 木村覚
笑芸と「限界学問」 鈴木亘
可笑しみを通して自己に気づく 八重樫徹
笑いとユーモアの4段階と滑稽の理論 雨宮俊彦

第 60 号（7月）
【特集 梶掛良彦の人と仕事】
梶掛先生は二度死ぬ 野村喜和夫
東西古今の人 川合康三
枯れるをまねぶ 近藤昌夫

第 61 号（8月）
【特集 心理療法におけるフィクションと自伝】
フィクショナルな意識の脱構築：臨床心理学と生態心理
学の交差点 村澤和多里
変身する自伝：アニメと私のもうひとつの人生 パントー・フランチエスコ
待合室で過ごす時間：フィクションと自伝をめぐって 阿部又一郎

【連載】
ポスト＝メディアム・コンディションにおける絵画について その3：絵画のモダン、ポストモダンのあとで
6 榎田倫広

第 62 号（9月）
ファシズムと帝国的性暴力：「物語化」の陥穽を眺める 内藤千珠子
終戦 80年目の余波のなかで、戦時の絵画を考える：生き延びながら抗うこと 岡村幸宣
国家とコリアン・アーティスト：「日韓国交正常化」、「戦後」の意味を在日朝鮮人美術史から問う 白凜
カルト／文学：「彼ら」と「私たち」の距離をめぐって 菊間晴子
九州派と「サークル村」の女たち：田部光子・森崎和江・石牟礼道子を結んで 渡邊英理

第 63 号（10月）
【特集 「国語辞典」の現在地】
アーデルングの『ドイツ語辞典』(1793-1801年)：「私はこの神託者にいろいろとたずねてみたい」 高田博行

日本の辞書の現在・過去・未来 今野真二
「寄り添わない」辞書：見える信頼をつくれるか 見坊
行徳
学習者用の「国語辞典／日日辞典」の現在地 石黒圭

第 64 号（11月）

【特集 アルフレッド・ジエルの人類学】
ああ、アルフレッド、きみは何もわかっていない 内山
田康
仮面の里帰り 吉田ゆか子
現代美術とジエルの人類学 登久希子
芸術の現場と理論を行き来して 緒方しらべ

第 65 号（12月）

【特集 映画と精神分析】
精神分析から考える映像の「触覚性」：アルモドバルと

ベンヤミン 伊集院敬行
情動の唯物論的な露呈：『チャーリとチョコレート工場』
の場合 遠藤 不比人
映画と精神分析の親密性 木原圭翔
精神分析臨床で映画が登場したら 小林陵

【追悼 滝沼圭司】

滝沼圭司頌：大胆にして小心、ダンディにしてシャイ
佐々木健一
滝沼圭司先生を偲んで 津上英輔
滝沼圭司先生を追悼する 木村建哉

【連載】

ローマのメチャクチャ小説：本棚の片隅に 25 四方田
犬彦

水声社の新刊

(2025 / 12 / 26)

【2026年1月の新刊（予定）】

《知の革命家たち》

ジル・ドゥルーズ——思考のイメージ

堀千晶

【1.15発売】

▶芸術や科学といった異なる領域を縦横無尽に通過して、概念の衝突と共鳴の
はてに新たな思考と文体を哲学にもたらした思想家は、映像が思考を席巻する
世界をも見つめていた。知覚や行動、情動、身体、記憶、言葉について、空間
論から物語論、俳優論、ジェンダー論まで、美学・批評・政治が交叉する『シ
ネマ』を紐解き、まだ見ぬ思考のイメージを映し出す。



四六判上製／195頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0965-3

《知の革命家たち》

カールハインツ・シュトックハウゼン

——私は音になる

松平敬

【1.15発売】

▶電子音楽、空間音楽、モメント形式、直観音楽、フォルメル技法など、様々な作曲技法を展開し、20世紀音楽の革新を牽引した変革者。その特異な結婚生活から神的なものへの傾倒、そして宇宙へと向かう意識がいかに作品に結びついたかを描き出し、謎多き作曲家の全貌を明らかにする！



四六判上製／187頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0961-5

《知の革命家たち》

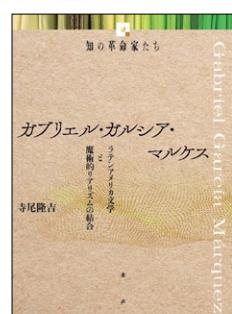
ガブリエル・ガルシア・マルケス

——ラテンアメリカ文学と魔術的リアリズムの結合

寺尾隆吉

【1.15発売】

▶驚異的現実の日常化、過去と未来が交錯する複雑な時間構成、不正のはびこる世界に生きる者たちの挫折と孤独……。〈魔術的リアリズム〉を代表する作家の小説技法から、ラテンアメリカ文学のブームとの関係、故国に渦巻く暴力的事件のルポルタージュに至るまで、全主要作品を詳解。作家の全容に迫る。



四六判上製／184頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0965-3

《知の革命家たち》

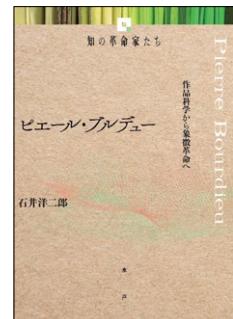
ピエール・ブルデュー——作品科学から象徴革命へ

石井洋二郎

【1.15 発売】

▶常に弱者への共感と連帯に突き動かされた〈闘う知識人〉。「文化資本」や「社会空間」などの概念を提唱して現代社会学の基礎を築くにとどまらず、文学・芸術作品を相互的ネットワークの中に置き直すことで、創造性や作者性をめぐる神話を徹底的に解体し、作品の新たな捉え方を切り開いた。膨大な著作のなかから『芸術の規則』をとりあげ、その思想のアクチュアリティに迫る！

四六判上製／173頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0963-9



《知の革命家たち》

ルネ・シャール——閃光の詩学

野村喜和夫

【1.15 発売】

▶「おまえの虹色の渴きをうたえ」——謎めいたフレーズがイメージの連鎖を呼び、ちぎれた言葉のあいまから、存在の神秘が閃光のようにきらめく。全体主義に覆われた「夜の時代」を耐え忍び、危機の最中でポエジーを掴み、難解なメタポエティックから自然の息吹に満ちた詩篇に至るまで、アフォリズムの可能性を突き詰めた詩人の核心に迫る。

四六判上製／162頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0964-6



テーマとジャンルの詩学

《叢書 20世紀ロシア文化史再考》

フレイデンベルク 杉谷倫枝訳

【1.10 発売】

▶あらゆる現象は人類の集合意識の諸形態であるという理解の下、夥しいヨーロッパの神話と儀礼を分析し、文学のテーマとジャンルを産み出した原始社会の〈集団的思考〉に迫る。レヴィ=ストロースの神話学、バフチンのカーニバル論の先駆者と目される、スターリン体制下で世を去った文芸学者の主著。

四六判上製／520頁／5000円＋税 ISBN：978-4-8010-0947-9



ギー・ドゥボール全著作 第1巻 1950-1961

ジャン=ルイ・ランソン+アリス・ドゥボール編 木下誠訳

【1.10 発売】

▶1968年5月のパリに渦巻く熱気のなかで、人々を街頭へ押し出した革命的思想家のテキストを網羅する全3巻。第1巻は1950年から1961年にかけて、映画界への痛烈な殴り込みでデビューし、レトリスム・インターナショナルからシチュアシオニスト・インターナショナルへと急進した時期のテキストを収録。

A5判上製／804頁／12000円＋税 ISBN：978-4-8010-0891-5



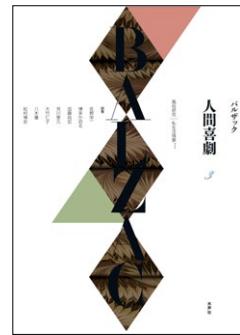
《人間喜劇 3》 風俗研究 私生活情景***

バルザック 私市保彦+柏木隆雄=責任編集

【1.25 発売】

►バルザック自身の構想に沿い、あまりにも膨大な『人間喜劇』の全体像を邦訳によって明らかにしようとする初の試み。第3巻には、母との死別を経て精神的成长を遂げる少年たちを描いた短篇『柘榴屋敷』や、〈観察者〉としての代訴人を通じて、社会的公正を行なう者も私生活では一人の傍観者にすぎないことを浮かび上がらせる『ゴプセック』など6の中短篇小説を収録。

A5判上製／788頁／12000円+税 ISBN：978-4-8010-0902-8



《日本しま紀行 3》 太平洋の島々 (I)

——宮城県・東京都篇

乾政秀

【1.25 発売】

►海洋環境と水産業の元コンサルタントが、民間人の住む日本のすべての有人離島をめぐり歩いた紀行文集。離島に関心のある方々から、水産業関係者、島に生きる方々まで、必読の書。収録内容：気仙沼大島、出島、江島、金華山、網地島、田代島、桂島、野々島、寒風沢島、朴島、伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島（宮城県、東京都）。

四六判並製／416頁／3500円+税 ISBN：978-4-8010-0922-6



リベラルアーツと歴史

石井洋二郎+鈴木順子編

【1.25 発売】

►公的記録から私的な文書に至るまで、無数の史料に耳を澄ませながら、歴史家は〈語る言葉〉そのものを練り上げる。その営みは、アイデンティティを相対化し、思考をくびきから解き放つ——歴史学が描き出す、創造的リベラルアーツの現在。

四六判並製／248頁／2500円+税 ISBN：978-4-8010-0952-3



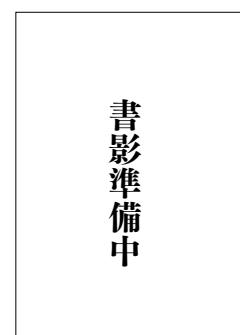
認知主義に彷徨う——精神分析と認知科学

エリック・ローラン 小林芳樹訳

【1.30 発売】

►現代を代表するラカン派精神分析家の一人が認知科学、言語学、神経科学、認知主義的精神分析、実用主義的功利主義、操作的診断、治療マニュアル、認知行動療法等々を縦横無尽に論じ、見せかけだけの科学から「主体」を取り返す！

四六判上製／224頁／2800円+税 ISBN：978-4-8010-0898-4



オペラ／音楽劇研究の最前線

—共鳴する人と社会

佐藤英+大西由紀+岡本佳子+萩原里香+森本頼子編

【1.30 発売】

▶複合芸術として自らの裾野を拡大し続けてきたオペラ／音楽劇は、各国の政治情勢、異文化との邂逅、新メディアの隆盛を受けて、どのように変容を重ね、現在にいたったのか。舞台上で、学術研究で、いま追究される課題を17名の専門家が多角的に論じる。

A5判上製／452頁／6500円＋税 ISBN：978-4-8010-0946-2



【2025年12月の新刊（既刊）】

美学のアップデート

吉岡洋

【12.1 発売】

▶オペレーティング・システムとしての美学を更新せよ！ 反省的思考（リフレクション）を許さない時勢に抗い、価値判断の根拠を問い合わせ直すことこそ美学である——既成概念ではなく私たちの日常経験によってたつ、新しい美学入門。

四六判並製／196頁／1800円＋税 ISBN：978-4-8010-0941-7



菅亮平 Around the Void

町立久万美術館+菅亮平 編

【12.4 発売】

▶絵画、写真、映像、立体、サウンド、パフォーマンスなど、多様な表現メディアを横断し、国内外で活躍する気鋭の美術家の作品集。「中身のない、空っぽの」を意味する「Void」を鍵に、無限に反覆するホワイトキューブから被爆再現人形をめぐるプロジェクトまで、空虚と想起、歴史継承を問う。

A4変型判上製／192頁／3500円＋税 ISBN：978-4-8010-0897-7



《人間喜劇 2》 風俗研究 私生活情景**

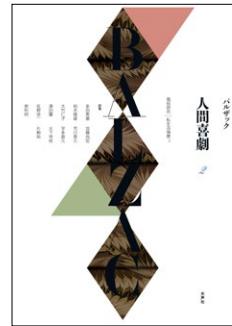
オノレ・ド・バルザック

多田寿康+柏木隆雄+大竹仁子+澤田肇+佐野栄一+

泉利明+加藤尚宏+芳川泰久+宇多直久+大下祥枝+片桐祐訳 【12.18 発売】

►コルシカの復讐の伝統を背景に、社会的上昇を夢見る若者と、血の掟に縛られた母との葛藤を描く本邦初訳の「ラ・ヴァンデッタ」や、愚かさと虚榮心の戒めを語る「人生への門出」、愛と策略の交錯を描き出す「アルベール・サヴァリュス」など10の中短編小説を収録。

A5判上製／784頁／12000円+税 ISBN：978-4-8010-0901-1



だからひとは蜻蛉を愛する

マルク=アラン・ウアクニン 高山花子訳

【12.18 発売】

►見えざる世界をひもとき、言葉の深みへと誘う。ユダヤ神秘主義の深奥にあるエッセンスを、現代のラビがカフカやデリダなどの文学・哲学を通して説き明かす。知の秘奥に分け入る対話型のエッセイと、カバラの象徴や問いかけの力に触れる論考。読むたびに世界の見え方が変容する。

四六判上製／312頁／3500円+税 ISBN：978-4-8010-0944-8

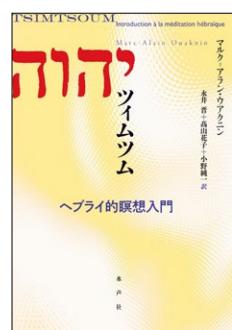


ツイムツム——ヘブライ的瞑想入門

マルク=アラン・ウアクニン 永井晋+高山花子+小野純一訳 【12.18 発売】

►神の痕跡としての文字が、再び新たな意味へと炸裂する。ハシディズム、ミドラシュ、ゲマトリア……連綿たるカバラの論理を、現代に生きるラビが明快に解きほぐす。思想と瞑想、書記法と実践が重なり合う地平に、世界の輪郭が新たに浮かび上がる。

四六判上製／368頁／3500円+税 ISBN：978-4-8010-0945-5



《日本しま紀行 2》 日本海の島々 (II)

——石川県・島根県・山口県・福岡県 篇

乾政秀

【12.19 発売】

►海洋環境と水産業の元コンサルタントが、民間人の住む日本の全ての有人離島をめぐり歩き、島々の産業、文化、暮らしのありさまを活写する。

収録内容=舳倉島、島後島、中ノ島、西ノ島、知夫里島、萩大島、櫃島、相島、見島、蓋井島、六連島、馬島、藍島

四六判並製／310頁／3000円+税 ISBN：978-4-8010-0921-9



無明のフィロソフィア

小林康夫

【12.25 発売】

▶『わたしは、夜のなかの燈台のように、世界のなかのひとつの明なのだ。』身体から発し、死を超えて、世界の問いかけに応答する。みずからの存在を賭けた、道標なき哲学の冒険=遊び。

四六判上製／256 頁／2500 円+税 ISBN：978-4-8010-0951-6



ラカン リアニメイテッド

——アニメが明かす享楽の精神分析

久保田泰考

【12.25 発売】

▶精神分析の諸概念を鮮烈にリアニメイト=再起動し、享樂する「症状」へと変成する現代のアニメを通じて、セクシュアリティ・身体、そして「こころの病理」を新たな地平から読み替える！ 本書で取り上げる主な作品=『若おかみは小学生！』、『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』、『シン・エヴァ』他

四六判上製／268 頁／2800 円+税 ISBN：978-4-8010-0949-3



アリス・ギイ・ブラシェ——世界初の女性映画監督

アリス・マクマハン 吉田はるみ訳

【12.27 発売】

▶リュミエール兄弟やメリエスと並んでいちはやく物語映画を製作し、フランスで、そしてアメリカで、20世紀初頭の映画の最先端をつくった女性——忘却された女性映画監督の功績を、混沌とした黎明期映画の輪郭とともに丹念に描き出す。

A5 判上製／360 頁／6000 円+税 ISBN：978-4-8010-0940-0



サッカーチームはいかに構成されるか

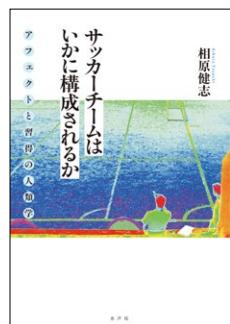
——アフェクトと習得の人類学

相原健志

【12.27 発売】

▶これまで人類学で議論されてこなかったサッカートレーニングの現場を習得論とアフェクト論から考察していく民族誌。ポルトガルの地域チームの育成年代に実質的なコーチとして参与観察しながら、彼らが困難に直面しながらひとつの「チーム」になっていく姿に迫る。

四六判上製／327 頁／5000 円+税 ISBN：978-4-8010-0950-9



水声社

東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suiseisha.net